

2022年11月1日

みずほディーラーズアイ (2022年11月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 143.00 ~ 153.00

市場営業部 為替営業第一チーム 牛島 智之

■ 先月の為替相場

月初のドル円相場は、145円手前で始まり、3日は一時145円台に上乘せする場面も見られたものの、総じて動向の薄い展開。米国時間から米株式が反発し始めると、米金利も大きく低下。ドル円もじり安となり144円台前半まで下落。5日に一時的に143円台まで小幅下落。7日に公表された米9月雇用統計は、非農業部門雇用者数、失業率ともに事前予想を上回る好調な結果となり、FRBによるタカ派姿勢が継続するとの思惑から米金利上昇、米株下落とともにドル高となり、ドル円は145円台半ばでの推移となった。

第二週。10日は東京休場となる中で、ドル円は145.80円台までジリ高の展開。前回の為替介入時の水準(145.90円)手前では警戒感から上値重く推移し、11日は145.90円手前で横ばい推移となったものの、12日のアジア時間早朝に145.90円を突破すると146円台に突入。日銀の黒田総裁が「物価安定目標達成のために緩和を継続する」との発言も円売りを誘発し146.98円まで上伸。13日の米9月消費者物価指数は、総合・コアともに事前予想を上回る結果となり、ドル円は147.66円まで上昇。1998年の高値147.64円を一時的に上回ったが、その後は介入警戒感から小幅反落した。14日には鈴木財務相や黒田総裁から円安牽制発言が見られたものの、米金利上昇とともに円安基調が継続。米9月小売売上高は予想比弱めの結果となり、円が買い戻される局面もあったが、その後の米10月シンガン大学消費者信頼感指数を契機に148円台にあっさり乗せると、148.86円まで上昇した。

第三週。17日は特段と目新しい材料に乏しい中で徐々に円安余地を探る展開が継続。市場全体ではややリスクオンとなり米株は大きく反発し米金利は小幅低下となったものの、円が買い戻されることはなく、ドル円は149円台を示現。18日には欧州時間に一時148.13円まで1円程度急落する局面があったものの、米国時間には再び円安となると149.39円まで高値を更新。その後も円安基調は続き、19日は149.90円まで高値を更新。20日には150円台に乗せ、21日には米国時間に151.94円まで上伸。但し、その後は一部報道でFRBが利上げペースを鈍化させる可能性が示唆されるとドル売り優勢となり、市場介入と噂される大規模な円買いで145.50円まで急落した。

第四週。24日にはアジア時間序盤に145.28円まで再び円が大きく買われる局面もあったが、その後は149円を挟んで膠着。25日に米10月消費者信頼感指数が弱めの結果となると147.52円まで下落。その後も米金利低下とともにドル売りが継続し、27日には145.11円の安値を付けた。その後は米金利の反発とともにドル円も小幅に持ち直し、月末にかけては147円台で推移した。

■ 今月の見通し

11月のドル円相場は、引き続き上値を試す展開が継続するとみられる。11月2日に予定されているFOMCでは75bpの利上げがほぼ織り込み済みの状況。従って、75bpの利上げ自体は相場への影響が限られると思われるが、次回の12月14日の会合での利上げ幅についてどういったサインが出されるのか、注目が集まる。足元では、50bpとの意見が多いものの、75bpとの見方も相応にある。

先月発表された米9月消費者物価指数は、燃料価格の下落により総合指数は前年比で8.2%と前月実績の8.3%から小幅低下したものの、コア指数は主に家賃の上昇から前年比6.6%と前月実績の6.3%から上昇している。FEDがインフレ抑制にプライオリティを置いている中、足元のインフレ指標が未だに上昇し続けている限り、FOMCでもタカ派なコメントが出てくることが想定される。

日銀の黒田総裁は金融緩和を維持するコメントを繰り返しており、本邦は主要国の中では唯一のマイナス金利適用国となっているが、2日のFOMCが引き続きタカ派の内容となれば、日米金融政策スタンスの差が意識され、円安が進行すると予想される。

一方で、短期的にドル円が下落する要素もいくつか想定される。例えば、一部のFED高官からは、金融引き締めの一過剰に対する経済への悪影響を懸念する声が出ている。足元の利上げ織り込み状況やそれを踏まえた米短期金利の上昇ペースが速いため、今後も同様のコメントが相次げば、米金利低下とともにドル売りの契機になりそうだ。

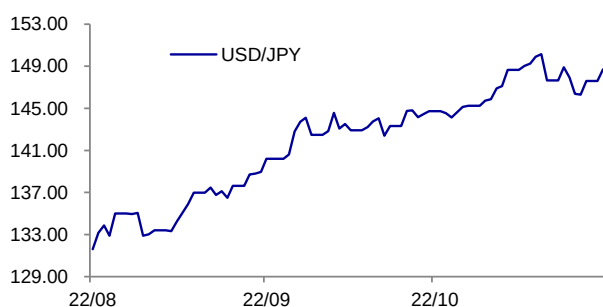
また、本邦当局からは投機的な円売りに対する牽制発言がしばしばみられる。円買い介入に対する市場の警戒感も燃り続けているため、突発的に円が買い戻される局面はありそうだ。

本邦では、10月11日から外国人の個人旅行を解禁しており、既に多くの外国人観光客を目にするようになったが、彼らのインバウンド消費は一定の円安抑制効果が期待される。

これらを勘案すると、基本的には円安継続するものの、短期的なディップの局面が出てきつつ、円安スピードは緩慢なものになる、というシナリオが想定される。

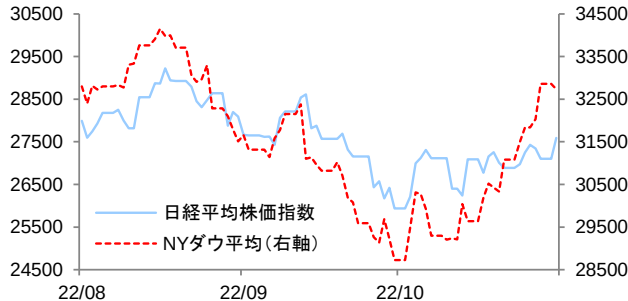
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	米ISM製造業景況指数	9月	52.0	50.9	52.8
10/7	米非農業部門雇用者数	9月	255K	263K	315K
10/7	米失業率	9月	3.7%	3.5%	3.7%
10/13	米消費者物価指数(前年比)	9月	8.1%	8.2%	8.3%
10/14	米小売売上高(前月比)	9月	0.2%	0.0%	0.3%
10/14	米シンガン大学消費者信頼感指数	10月	58.8	59.8	58.6
10/17	米NY連銀製造業景気指数	10月	-4.3	-9.1	-1.5
10/20	米フィラデルフィア連銀景況指数	10月	-5.0	-8.7	-9.9
10/27	ECB主要政策金利	10/27	2.00%	2.00%	1.25%
10/27	米GDP(前期比年率)	3Q	2.4%	2.6%	-0.6%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	12名	152.00 ～ 144.75	ベア	6名	150.50 ～ 142.00
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

矢野	ベア	150.00 ～ 142.00	円安に対する当局の姿勢からすれば、高値更新時には介入警戒感が強まることから、ここからの介入余地は限定的。米雇用統計やCPI等に頭打ち感があれば、値幅を伴った下方調整も想定される。下落リスクには注意したい。	松永	ベア	151.00 ～ 144.00	日銀の物価見通しが23年以降で2%を下回る中、FRBのインフレ抑制姿勢に変化なく、日米の金融政策の乖離が意識され円の弱さは変わらず。150円付近では介入警戒感が上値を抑えると予想する。
筒井	ブル	153.00 ～ 146.00	インフレの高止まりから米政策金利が利上げ幅を縮小させながらも5%到達を織り込み、かつ米経済は堅調推移という可能性が高い。ドル買い需要は輸入企業中心に旺盛、じわじわと円安トレンド継続。	小野崎	ベア	150.00 ～ 142.00	日米金融政策の違いは健在も材料視されるには十分に織り込み済。150円を超える水準では介入警戒感も高まることで上値の重い展開か。高値更新を渋る展開となると下落リスクにも警戒したい
加藤	ベア	152.00 ～ 142.00	FRBの金融引き締めがスピルオーバーし世界経済悪化に繋がるリスクを金融市場は感じているが米国はドル高を是正する必要を感じていない。投機筋けん制のため、本邦当局による米国当局および市場参加者との丁寧で効果的な対話が必要。	原田	ブル	154.00 ～ 143.00	先月の日銀金融政策決定会合では引き続き緩和維持の姿勢が確認される中、米国の利上げスピードに注目が集まる。円買い介入も断続的に確認される中ではあるものの、引き続きドル円は金利差による上昇モメンタムが維持されると予想。
山崎	ベア	148.00 ～ 140.00	米国経済の先行きへの懸念からやや下押し圧力強いのか。方向感の転換が模索されるタイミング。しかし、下へ走り出したらその速度は早いものと想定しており、下は140円レベルを見ておきたい。	上遠野	ブル	151.50 ～ 144.50	目下経済指標で軋みがで始め、12月FOMCでの利上げペース抑制観測は熾るものの、インフレ対策を優先的に講じるスタンスは11月も変化なく、高止まりする米金利を眺めドル円は高値圏でのみ合いか。
伊藤	ベア	152.00 ～ 145.00	FedPivot観測を受けてドル売りが先行したものの、米国のインフレが鈍化している明確なデータは未だ確認できず、ドルは強含みやすい。ただし、インフレ抑制効果が徐々に示されてくれば、ドル円の上値は重くなっていくだろう。	小林	ブル	152.00 ～ 143.50	米利上げペースの縮小観測により一時的に円高進行したものの、黒田総裁のBOJでの緩和政策維持を強調した発言内容を受けて、ドル円は円安基調が回復。ドル円は引き続き金融政策スタンスの違いによりドル買いの展開となろう。
山岸	ブル	152.00 ～ 144.00	直近の米国経済指標では個人消費・雇用とも堅調さを維持。年末にかけては利上げ幅縮小で、米金利上昇に天井感が見える可能性もあるも、上半期11兆円超の本邦貿易赤字を背景とした円売り実需あり、ドル円が大きく下げる展開は見込み薄か。	逸見	ブル	153.00 ～ 143.00	円を買う理由が不在の状況に変化はなし。一方、米国は雇用やインフレなどの実態面が確認できていない中、市場の思惑はFedの連続大幅利上げからペース鈍化を意識。思惑が裏切られた際のアップサイドリスクに警戒したい。
尾身	ブル	155.00 ～ 145.00	米国の積極的な金融引き締めを受けてドル/円の上昇基調は継続すると予想。但し、円安牽制を受けてスピードは緩やかとなりそう。また、ドルインデックスが高いため、ドル高の調整には警戒している。	鈴木	ブル	152.00 ～ 145.00	FOMCの金利引き上げペースにはやや鈍化がみられる可能性はあるものの、日米金利差を背景とした円売りは依然として根強い。介入への警戒感からこれまでの勢いはなくとも、引き続き底堅い推移を予想する。
上野	ブル	152.00 ～ 146.00	年内の利上げペース鈍化観測が高まりを見せる中、米債利回りの低下とともにドル円は上昇トリガーを失いつつある。しかし、ペース鈍化は相応に織り込まれており、また円を買う明確な理由に乏しい状況下、依然上値リスクを警戒すべきか。	木村	ブル	152.00 ～ 145.00	日米の金融政策スタンスには依然明確な差があるため堅調推移を予想するも、Fedの利上げペース減速への期待が強まっており、為替介入への警戒もある中では上昇ペースはこれまでより緩やかになると思われる。
甲斐	ブル	153.00 ～ 146.00	11月FOMCではFRBのタカ派スタンスを再確認するものと予想。インフレ率の鈍化が確認できるまでは、一段の利上げ期待は再び高まるものと思われ、米金利上昇とともに、ド円は一段の円安進行を予想する。	大熊	ブル	152.00 ～ 144.00	足許の米経済は依然として底堅い状況下、FRBが利上げペース鈍化を示唆したとしても、日米金利差は拡大局面にあることに変わりはない。ドルの上値は限定的な一方で、円安基調は不変と思われることから、ドル/円は底堅い展開を予想。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 0.9600 ~ 1.0150
EUR/JPY 141.00 ~ 149.00

市場営業部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

■ 先月の為替相場

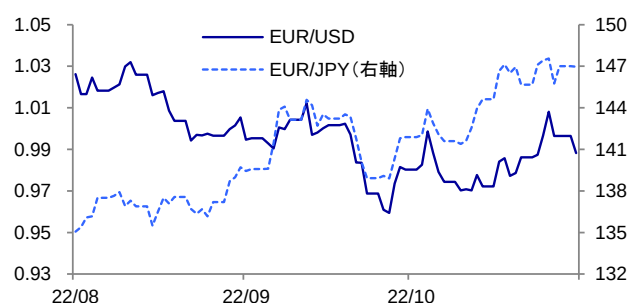
月初3日、ユーロは米金利低下を受けて小確りと推移し、ユーロ/ドルは0.98台半ばまで上昇した。4日も堅調な株式市場にサポートされ0.99ちょうど付近までし、9月20日以来のパリティ(1ユーロ=1ドル)回復を試し週高値の0.9999まで上昇。5日、再びパリティ回復を試すも、0.9995に留まると、その後はユーロ圏9月総合PMIの悪化によるユーロ売りや米経済指標の良好な結果を受けたドル買いにユーロは0.99台を維持できず、0.98台前半まで急落。6日もユーロは軟調に推移し0.9789まで下落した。7日、0.98ちょうど付近をもみ合った後、米9月雇用統計の結果を受けドル買い優勢の中、0.97前半まで下落し、10日もユーロは0.97台半ばまで上伸も軟調推移を継続。11日もベイリーBOE総裁のボンド安への緊急国債買い入れ措置終了発言に英ポンド売りが波及し0.97台前半で上値の重い展開となった。12日、0.97ちょうどを挟みでの方向感に欠ける値動きが継続。13日は強い米9月CPIの結果を受けて0.96前半まで急落も、欧州株持ち直しに0.9806まで急上昇する荒い展開に。14日はボンドに連れ高する形で0.9808まで上昇。17日、欧州株の堅調推移を受けて0.98台半ばまで急伸するも、18日英ポンドの下落にユーロも連れ安となり一時0.98台前半まで下落した。19日、米金利上昇や欧州株の軟調推移にドル買い優勢となり、0.97台半ばまで急落。20日、株式市場の持ち直しやトラス英首相の辞任表明を受けた英ポンドの上昇に連れ高となり0.98台半ばまで急伸。21日、米長期金利が4.3%台に上昇する流れに0.97台前半まで下落するも、その後覆面介入とみられる動きにドル円が約6円急落する中でユーロも0.98台半ばまで上昇した。24日はユーロ圏10月製造業PMIの冴えない結果が重しとなり0.9807まで下落したものの、25日は独10月IFO景況指数の良好な結果や欧州株の堅調推移を受けユーロ買いが加速し0.99台後半まで上昇した。26日には欧州株の堅調推移にサポートされパリティを回復。1.00台後半まで急伸し、約1か月半ぶりの高値圏での値動きとなった。27日、ECBの利上げ決定にサポートされる時間もあったが、米7~9月期GDPの良好な結果にドル買いが強まり、0.99台半ばまで下落。28日、一時0.9998まで上昇するもパリティ回復には至らず0.9928まで反落した。月末31日も依然米金利上昇が重しとなる中、FOMCの前に方向感に乏しく0.99半ばでのレンジ推移となっている。

■ 今月の見通し

今月のユーロは上値の重い内容を予想。ECBによる継続利上げやウクライナ情勢を背景とした冬場にかけてのエネルギー不安等から景気減速が顕著となる中、先行き不透明感からユーロは上値を押さえられ易いだろう。先月行われたECB会合では大方の市場予想通り政策金利を75bp利上げすることを決定。利上げは3会合連続で、75bpの利上げは前回9月に続き2会合連続。中銀預金金利は0.75%から1.50%へ引き上げられ2009年以来の高水準となった。また、同時にターゲット型長期流動性供給オペ第三弾(TLTROⅢ)の条件変更が決定された。利上げによる金利上昇が適切に融資条件に反映されるようにし、銀行に早期返済を促し引き締め効果が抑制されることを阻止することで、引き締めスタンスを鮮明にした。他方、ECBは今回資産買入プログラム(APP)については、購入した債券の償還資金の再投資を継続することを表明し、保有債の縮小に関する議論は12月持ち越しとなった。また声明文においては追加利上げを想定するとしつつ、前回までの「今後数回に渡って利上げを行う」との文言が削除され、ECBによる利上げペース鈍化観測からユーロ売りが優勢となる場面があった。その後ラガルドECB総裁は、「物価を中期目標に戻すため一段と利上げを進める予定」とし、QTを巡る議論も12月という具体的スケジュール提示を受けて過度なユーロ売りとはならなかったが、ECB会合前のパリティ越えの勢いは抑制される形となった。目下、ユーロ圏のインフレは高止まったままであり、9月ユーロ圏物価上昇率は9.9%と5ヶ月連続で過去最高を更新。インフレ対策を最優先するECBとしては利上げペースを緩めたくないところであろうが、混乱とするウクライナ情勢を背景としたエネルギー供給懸念が季節柄一段と厳しくなる環境下、域内金利上昇に苦む一部加盟国間格差への対応は非常に難しいところ。財政に不安を抱えるイタリアの長期金利は上昇を続け、ドイツとの金利差は2%を超える状況。諸刃の剣としてのQTは10月会合での議論を見送ったものの12月以降本格化する議論次第では債務不安を再度誘因し、総じてスタグフレーションは一段と差し迫ったものとなる可能性がある。ECBは28日の専門家調査を発表し、インフレ率予想は23年に5.5%とECBの予想(5.5%)を上回り、また経済成長率予想は23年0.1%とこれもECB予想(0.9%)を大きく下回る結果となり、ECBの悲観シナリオ(▲0.9%)に一步近づいた格好。インフレと景気後退の狭間で市場との対話を丁寧に行い絶妙なハンドリングが求められる中、ユーロにポジションを傾けにくい地合いが継続するものと考えられる。

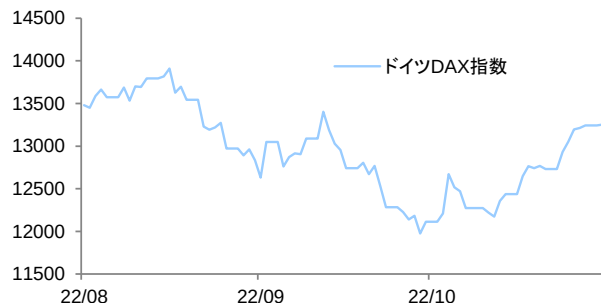
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	ユーロ圏製造業PMI(確報値)	9月	48.5	48.4	48.4
10/5	ユーロ圏サービス業PMI(確報値)	9月	48.9	48.8	48.8
10/6	ユーロ圏小売売上高(前月比)	8月	-0.3%	-0.3%	-0.4%
10/14	ユーロ圏貿易収支(季調済)	8月	-45.0b	-47.3b	-40.5b
10/24	ユーロ圏製造業PMI(速報値)	10月	47.9	46.6	48.4
10/24	ユーロ圏サービス業PMI(速報値)	10月	48.2	48.2	48.8
10/27	ECB主要政策金利	10月	2.00%	2.00%	1.25%
10/28	景況感	10月	92.4	92.5	93.6
10/28	鉱工業信頼感指数	10月	-1.5	-1.2	-0.3
10/28	消費者信頼感	10月	-	27.6	27.6

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ

ブル	6名	1.0325 ～ 0.9700	ベア	12名	1.0125 ～ 0.9500
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

矢野	ブル	1.0200 ～ 0.9700	ECBによる預金ファシリティ引き上げは2会合連続となるなど、物価上昇抑制に向けた動きが加速している。米国では徐々に過熱感が冷える方向感の一方、欧州ではその段階ではなく、欧米金利差縮小の思惑から下値の堅い推移を予想。
筒井	ベア	1.0000 ～ 0.9500	ロシア・ウクライナ情勢の膠着状態の継続及び中国経済の停滞がスタグフレーション状況を更に悪化させるだろう。ECBのDovish Hike姿勢明確で、米独金利差拡大により、ユーロ安継続。
加藤	ベア	1.0100 ～ 0.9600	これまでユーロ圏ではその貿易黒字を背景に鉄壁の需給圧力がユーロ買いを支えてきた。しかし、そのフローを失った今金融政策の整合性が重要視される段階にきている。ドイツなどは世界で最もスタグフレーションに近い経済となっている。
山崎	ブル	1.0350 ～ 0.9750	欧州圏は引き続き買いづらい状況という認識のもと、米国の経済減速懸念からのドル売りから一旦は上昇か。しかし、上値は限定的であり、上昇は継続せず、上値が重い状況が継続するもの。
伊藤	ベア	1.0200 ～ 0.9500	Fedの金融引締め後退期待に一旦買い戻されたが、引き続き欧州を取り巻く環境を鑑みれば上値重い相場が継続するだろう。米国のインフレ鈍化を示すデータは未だ確認できず。米国の金融政策パス織り込みに振られる展開となりそう。
山岸	ブル	1.0400 ～ 0.9600	ECB追加利上げ観測で底堅い展開を予想。インフレ率は日米を上回る10%前後の記録的な上昇、物価上昇長期化でインフレスパイラルを警戒。利上げ余地大きいことに加え、チャート上も1年半近く続いた下落トレンドが底を打った可能性。
尾身	ベア	1.0100 ～ 0.9500	欧州におけるエネルギー問題や景気鈍化懸念などが、ユーロ/ドルの重しとなり下落すると予想。但し、ECBによる積極的な利上げが相場の底支えとなり、下落幅は限定的か。
上野	ブル	1.0300 ～ 0.9700	米金融政策に振られる展開が継続する局面か。ユーロを主体的に買う理由は見出しづらいが、米利上げペースの鈍化観測の高まりはユーロドル相場には追い風。パリティ超えの水準定着を想定。
甲斐	ベア	1.0000 ～ 0.9500	11月FOMCでタカ派を確認すると再び米金利上昇、ドル買いユーロ売りになると予想。ロシアが全動員に傾く中、コモディティ価格上昇や地政学リスク懸念は高まると予想。次回ECBは12月15日。金融政策期待もしばらくはお休みか。

松永	ベア	1.0100 ～ 0.9500	ウクライナ問題や軟調な中国経済など、外部要因に起因するユーロ圏のスタグフレーション懸念から、軟調な推移を予想。ECBの利上げペースの鈍化もユーロの重しとなるとみる。
小野崎	ブル	1.0500 ～ 0.9700	FRBの利上げが織り込まれ終焉に向かう中でECBは利上げを継続。取り巻く不安材料はあるものの、徐々に値を戻す展開を想定
原田	ベア	1.1000 ～ 0.9600	米利上げ折り込み後退により先月後半はパリティ越えまで反発する場面も見られた。一方で、ウクライナ情勢やエネルギー問題を抱える欧州圏は、景気への不透明感も高い。係る状況下、ユーロは引き続き上値の思い展開を予想。
上遠野	ベア	1.0150 ～ 0.9600	ECBによる継続利上げやロシアからの供給懸念を背景とした冬場にかけての資源価格高騰リスクから景気減速が顕著となる中、先行き不透明感一段と強まり、ユーロは上値を押さえられやすいか。
小林	ベア	1.0200 ～ 0.9600	米利上げペースの縮小観測によりユーロドルは一時的にパリティ回復となるも、引き続きウクライナ情勢による地政学リスクの長期化、エネルギー不足問題などによる欧州圏の景気回復が見込めず、ユーロは軟調推移となろう。
逸見	ベア	1.0100 ～ 0.9400	ユーロ圏経済の脆弱さから、Fedのような大幅な連続利上げは困難か。地政学リスクやエネルギー問題など、不透明感の払拭に向けた兆しが見えない中、ユーロは引き続き軟調な推移を予想。
鈴木	ブル	1.0200 ～ 0.9970	ウクライナ情勢をはじめ懸念事項は多いものの、米金利引き上げペースの鈍化が織り込まれ始める中、売られすぎたユーロは調整局面を予想。パリティ近辺での攻防が値動きの中心か。
木村	ベア	1.1000 ～ 0.9500	米金利上昇ペース減速期待から10月末に上昇したユーロドルだが、パリティより上の水準では上値が重いように見受けられる。冬季のエネルギー需要上昇も欧州圏の足かせとなり、再度下落する展開を想定する。
大熊	ベア	1.1000 ～ 0.9700	エネルギー問題はウクライナ情勢の不透明感もあって予断を許さない状況下、米国より深刻なインフレ懸念が重しとなっている。経済指標からも米国の底堅さと比べると欧州は脆弱さが目立ち、ユーロは軟調な展開を予想する。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.1000 ~ 1.1900
GBP/JPY 163.00 ~ 175.00

欧州資金部 神田 史彦

■ 先月の為替相場

先月のポンドは上昇。
月初3日は、英財務省が件の減税案で一部見直しを行う、との報道に英国債の買い戻しで始まる。ポンドは対ドルで1.12台半ばまで買い戻されたが程なく利食われる。落ち着いた英国債の動きにポンドは5日には1.14台後半まで買い戻されたが、勢いは続かず。7日の堅調な米9月雇用統計も相まってドル買いに押されると、12日には1.0925の月中安値まで値を消す。その間、英中銀が緊急長期債買入措置の購入枠増枠やインフレ連動債を対象に追加すること、および英財務省が11月予定の財政計画を10月末へ前倒すこと、などを発表したもののポンドへの影響は限定的だった。12日は週末に終了予定の上記緊急措置への思惑でポンドに再び買い戻し。翌13日には、英政府が減税案の修正に着手しているとのヘッドラインにポンドは1.13台を回復した。14日は、クワテング財相が更迭され後任のハント財相が減税案の撤回を明言。翌17日にはトラス英首相のほぼすべての減税案を撤回すると発表。これにより9月終盤に始まった英金融市場の混乱は一旦終息した格好となった(トラス首相は20日に辞任し首相在任は45日と英国史上最短になった)。そこからはドル買いの勢いが高まった。20日には米10年利回りが07年以來に4.2%を超えるなど米金利の上昇圧力は止まらず。ポンドはユーロとともに売られ21日には1.10台まで下落。週明けにスナク氏が次期首相に選任されることが濃厚となると財政懸念が後退し英国債が買い戻される。ポンドも1.14近辺へ上昇する場面があった。25日には弱い米住宅価格を受けたドル売りの中でポンドは一気に1.14台を回復。新政権が財政計画の発表を11月17日に延期すると反落する場面もあったが27日にはそこまでの月中高値の1.1645まで上昇した。
一方で対円では、11日に160円を割り込んだが、17日には円安が継続したことでブレクジット国民投票前の2016年以來の170円を記録。21～24日にかけてはドル円の上下動に振られ165～169円台後半で推移した。25日にポンドが買われると再び170円台に上昇。月末まで170円近辺でのみ合いが続いた。

■ 今月の見通し

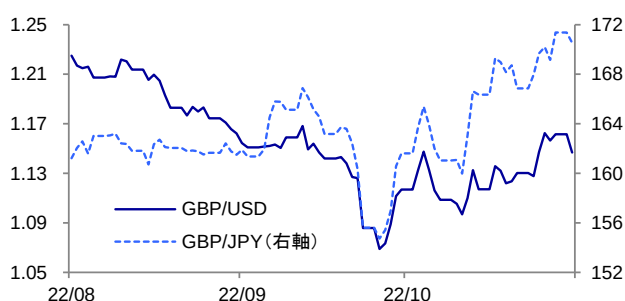
今月のポンドは上値重い展開が基本シナリオ。
減税案は撤回となったが、金融市場からは経常赤字国である英国の厳しい状況を再確認せられた格好で、今後もしばらく英国債市場の動向には注意が必要だ。スナク新首相は9月の保守党党首選で決選投票の末にトラス前首相に敗れたが、物価上昇が落ち着いてからの減税方針を示すなど慎重な姿勢で知られる。17日に公表予定の中期財政計画の内容次第では英国債の値動きが大きくなる可能性もあり注意を要する。一方で、減税案の撤回は財政健全化には資するものの、少なくとも短期的には英経済やセンチメントにはネガティブに働くことから各種経済統計ひいては英中銀の利上げ減速リスクも注目される。また短期金利上昇に伴う住宅ローン金利の高騰も問題となっており、混乱を避けるために一部業者では新規のローン貸出の停止も見られた。英国では固定金利のローンを借り替えていくことが一般的であり、借り替え後の利払い額が月に何百ポンド単位(2年固定金利は前年比で約3倍となっている模様)で増え、個人消費のさらなる停滞が予想されている。そして、やはり注目は3日予定の英中銀の政策決定会合。10月後半に英中銀のブロードベント政策委員が「政策金利は現在市場が織り込むほど上がらないかもしれない」と述べており、弊行ロンドン支店シニアエコノミストのアッシャーによると「同委員は中立的な姿勢で知られており多数派に属することが多い」とのことで「現在、11月の利上げ幅は0.75%方向へ傾いている」としている。利上げ幅だけではポンドの上方リスクは限定されそうで、票の割れ方など今後の英中銀の姿勢に焦点が集まるだろう。
なお、通貨オプション市場で観測されるインプライド・ボラティリティは、英中銀後までの対ドルのポンド変動をおよそ±1.7%程度、1カ月の変動をおよそ±3%程度と見込んでいる模様だ。また、9月末のポンド急落時に比べやや落ち着いたとはいえ、ポンドのプットオプション(売る権利)はコールオプション(買う権利)よりも引き続き高めにプライシングされており、下方リスクを警戒する向きは変わらない。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で今流行っていること(流行っているもの)』
テムズ川のほとりチェルシーの付近に、不定期に夜の数時間だけ店を開ける小さな割烹がある。完全予約制で、好きな酒を持ち込むこともできる。エレベーターを上り、使い古びた赤絨毯を数歩進むと民家に似たドアが現れ、そこから中に入ることができる。北側を向く窓の外には、チェルシーやケンジントンの住居街や、煙突から立ち登る煙、美しい緑が広がる。酒の肴は、Padron pepper やWingsが定番だが、もつばら、酒を飲みながら談笑することに集中し、肴は二の次となることも多い。店主の好みである近頃の流行歌のメロディーが心地良くビールの味に混じり、ピアニストKの指が鍵盤を軽やかに駆け回るように、僕らのビールを飲むペースが上がっていく。新入りの店員Timは、仕事を忘れ別室で休憩すること多いが、常連からの評判はとても良く、思うがままに頭痛を揉み、出欠表に×を並べるよりはむしろ働き者かもしれない。ビールからイエガーへと酒が進む頃、ピアニストKと古くより親交の深いMは、顔を赤らめうたた寝につくKを横目に、彼への想いを静かに語り始める。僕らは、Jerseyで酔った彼が、そこには居合わせぬ愛する女性Mの名前を幾度も呼び掛ける姿を知っているが、皮肉にもそれは別のMの名前だ。止まらぬKへの想いを口にするMを、僕は複雑な気持ちで慰めながら、その都度イエガーショットに、本心を隠す僕の罪悪感の火消しを依頼する。[が最良にする大貫妙子のメロディーが流れ始める頃には、誰もが記憶を失い、翌朝、頭に流れる彼女の歌声を目印に、宴の入り口へと記憶を辿ることになる。残念なことに、この割烹は今月末で店を閉じるようだ。小さな部屋に残した拾い切れぬ程の思い出に感謝し、僕は次の割烹を探すため、歩みを始める。』

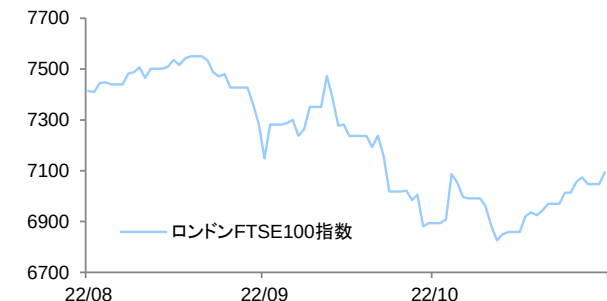
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	製造業PMI	9月	48.5	48.4	48.5
10/5	サービス業PMI	9月	49.2	50.0	49.2
10/6	建設業PMI	9月	48.0	52.3	49.2
10/11	ILO失業率	8月	3.6%	3.5%	3.6%
10/12	GDP(前月比)	8月	0.0%	-0.3%	0.1%
10/12	鉱工業生産(前年比)	8月	0.6%	-5.2%	-3.2%
10/19	消費者物価指数(前年比)	9月	10.0%	10.1%	9.9%
10/21	小売売上高(含自動車/前年比)	9月	-5.0%	-6.9%	-5.6%
10/24	製造業PMI	10月	48.0	45.8	48.4

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6170 ~ 0.6600
AUD/JPY 92.00 ~ 96.40

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

10月の豪ドルは2年半ぶりの安値を0.6170まで更新後、0.64近辺まで戻して推移した。上旬は0.65台から0.63台へ下落。低調な米指標を受けて、FRBの過度な引き締めに対する懸念が和らぎ、米金利が低下、米株は大幅に反発したことで豪ドルが支えられた。また、OPECプラスによる減産検討との報道でも上昇した。但し、RBAが予想よりも小幅な25bpの利上げを発表後、金利のピークが市場が予想していたよりも近いと解釈され、豪3年債金利は2008年以来の大幅低下となり、豪ドルは0.64半ばまで下落した。米9月雇用統計は堅調な結果となったことを受けてドル買いが優勢となり、豪ドルは0.63台後半まで下落した。

中旬は0.6170から0.63半ばのレンジで推移した。米9月雇用統計が予想以上に強い結果だったことを受け、米ドル買いの流れが継続。ウクライナでの戦争激化等を巡る報道も重しとなり株価が軟調に推移する中、豪ドルは下値を追う展開となった。更に13日、米9月CPIではヘッドラインとともにコア指数が予想以上に上昇し、前年比+8.2%と40年ぶりの高水準を記録した。これを受けて株価は急落、米金利は急上昇、豪ドルは0.6170まで大きく下落した。その後、英国の減税計画撤回による消費者心理の改善などを背景に株価上昇し、豪ドルも支えられた。トラス英首相辞任のヘッドラインを受けて英ポンドが大きく上昇すると、豪ドルも上値を追う展開となり一時0.6356まで上昇。その後、フィラデルフィア連銀ハーカー総裁が「政策金利を年内に4%を大きく上回る水準まで引き上げ、景気抑制的な水準で維持する可能性が高い」と発言したことが伝わると、米金利が上昇し、株価は下落。豪ドルは0.6280近辺まで大きく売られて引けた。

下旬は0.6210下落したが、本邦中銀による円買い介入との報道が見られる中で、ドル売りが強まり0.6210から再び0.64台へ乗せた。また、一部の米金融当局者が金融政策の引き締め過ぎを懸念しているとの報道で米債利回りの上昇が抑えられ、米株が反発した事も豪ドル高の地合いをサポートした。26日、豪7-9月期CPIでインフレ圧力継続が確認され、RBAが引き続き金融引き締めを行う正当性を裏付ける結果となった。月末にかけては0.64近辺で推移した。

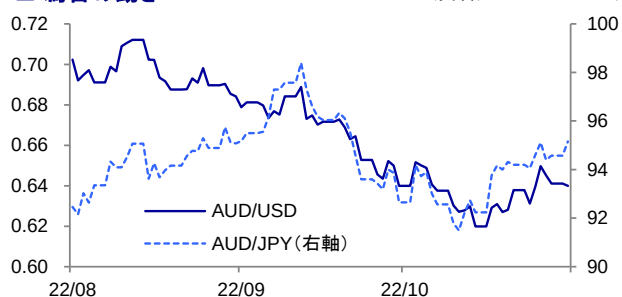
■ 今月の見通し

先月発表された豪7-9月期消費者物価指数ではすべての項目において前回値を上回り、32年ぶりの高水準に加速。インフレ加速が確認された。豪3Q消費者物価指数(前期比)の上昇は内訳をみると、住宅部門で10.5%、公共交通機関で9.2%、食料品(アルコール除く)で9.0%の上昇が大きく寄与した。RBAは10月に利上げ幅を50bpから25bpに縮小させたばかりであったが、この結果を受け、11月1日のRBA会合にて今後の豪利上げ軌道とターミナルレートの見直し修正の可能性に注目が集まる。今回の利上げ幅に関しては50bp利上げも可能性としては完全に拭えないが、市場の大方は25bpの利上げを予想している。ピークレートに関しては一部金融機関で概ねこれまでの予想より50bp程度上方修正している。その2日後、3日未明(シドニー時間)にはFOMC政策金利の発表が予定されており、市場予想ではFRBによる75bpの利上げが予想されている。豪州では非常にタイトな雇用環境、並びに個人消費やビジネス状況の好調さが継続しており、更なる利上げを正当化せざるを得ない状態ではあるが、米当局はそれ以上の利上げ幅をもってインフレ抑制を優先し、加速する物価上昇圧力に対し先手を打つ構えを見せている。よって、この両国の金利差は今後も来年に向けて拡大していくものとみられており、現在先物から見た2国間金利差は2月にピークを迎える事を示している。故に足元の豪ドルは米ドルへの資金流入継続で重く推移するとみる。

フィボナッチで見た豪ドルは10月末の上昇が年初来高値の0.7661(4月5日)と年初来安値0.6170(10月13日)でとった23.6%(0.6522)の水準で止められており、これを上抜けすると38.2%(0.6740)が見えてくる。23.6%(0.6522)を上抜けし、38.2%へ向かった場合、0.6522がサポートラインとなる可能性に注意したい。株価の値動きや米豪の金利差で考えた場合、豪ドル下値が大きく切り上がる事は考えにくい。ドル売り介入の報道やRBAのサプライズ発表などに際しては23.6%を一旦上抜けする可能性は十分に考えられる。一先ずは現時点でのRBA、FOMCの引き締め軌道とターミナルレートを確認したい。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
10/4	RBAキャッシュレート
10/6	貿易収支
10/11	CBA 家計消費 MoM
10/11	CBA 家計消費 YoY
10/18	RBA10月議事録要旨
10/20	雇用者数変化
10/20	失業率
10/20	参加率
10/26	CPI(前期比)
10/26	CPI(前年比)

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
10/4	2.85%	2.60%	2.35%
8月	A\$10000m	A\$8324m	A\$8967m
9月	-	-0.5%	0.9%
9月	-	14.1%	15.1%
10月	-	-	-
9月	25.0k	0.9k	36.3k
9月	3.5%	3.5%	3.5%
9月	66.6%	66.6%	66.6%
3Q	1.6%	1.8%	1.8%
3Q	7.0%	7.3%	6.1%

カナダドル相場

予想レンジ:	USD/CAD	1.3300	～	1.3800
	CAD/JPY	103.00	～	111.00

米州資金部カナダ室 芦崎 瑞穂

■ 先月の為替相場

10月は1.3725でオープン。ロシアによるウクライナ4州の併合宣言や、クリミア橋爆破をきっかけに、ウクライナ情勢は緊迫化。インフレはなかなか抑制されず、各国中銀は引き続き大幅利上げを実施。米国のターミナルレートは5%に達する可能性もあることから、USDドルが全面高となった。しかし経済減速のサインがデータに表れ始めており、世界経済が減速するとの懸念が高まっている。月後半にかけて、FRBの利上げペース減速観測が高まり、USDドル売りが強まっていった。

月初は米9月ISM製造業景況指数が軟調な結果となり、その後の米経済指標も強弱まちまちな結果となったことから、カナダドルが強含みで推移。5日OPECプラスによる日量200万バレルの大幅減産に原油が高騰。カナダドル買いが優勢となり、USD/CADは1.35台前半まで下落した。しかしFRB関係者からインフレ抑制をコミットするタカ派発言が相次ぎ、下値は堅く徐々に反発。7日発表の米国・カナダ両国の雇用統計では、ともに堅調な結果が示され、カナダは4か月ぶりに雇用者数がプラスとなった。13日米9月消費者物価指数は、コア指数が40年ぶりの高水準まで上昇。USD/CADは2020年以来となる1.3977まで急伸する場面が見られた。その後は市場に混乱をもたらした英国政府の経済政策が撤回されたことや、いくつかの米企業決算が好調だったことに株が買われ、リスク選好ムードにUSD/CADは1.37台前半へと反落。21日はデリー・サンフランシスコ連銀総裁から、利上げ幅縮小の計画を始めるべきとの発言があり、米紙ウォール・ストリート・ジャーナル (WSJ) も12月のFOMCで利上げペースが鈍化する可能性があるとして報道したことから、大幅な利上げ観測が後退し、USD/CADは更に1.3630まで値を下げた。米10月総合購買担当者景気指数(PMI)速報値が4か月連続で50を下回り縮小し、その後も米経済指標の冴えない結果が続くUSDドル買いの材料は乏しく、ドル安基調で推移。26日に開かれたカナダ中銀金融政策決定会合では50bpsの利上げが決定され、政策金利が3.75%へと引き上げられた。予想より小幅な利上げに、カナダドル売りが進みUSD/CADは1.36台半ばまで上昇したが、すぐに1.35台半ばへと反落。27日に75bpsの利上げを行ったECBもハト派傾斜となったことから、FRBの追従観測も強くなり、米長期金利は低下。USD/CADは1.3496まで下落した。月末はUSDドル安基調が続き、FOMC前に方向感のない動きとなっている。

■ 今月の見通し

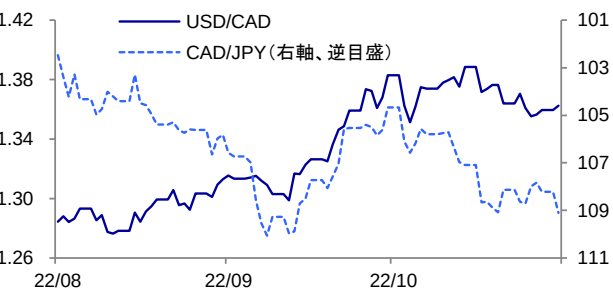
カナダの9月インフレ率は、ガソリン価格の下落が大きく寄与し、8月の7%から6.9%へと3ヶ月連続で減少。しかし食品価格は11.4%上昇し、41年ぶりの高い水準となった。コア指数も前回から横ばいとなっており、インフレ期待も高い。労働市場は依然ひっ迫しており、賃金圧力は5%と高止まっている。カナダ中銀が注視するBusiness outlook survey では、企業と消費者の景況感が、2020年以来の最大の下落となった。このような中、10月のカナダ中銀金融政策決定会合では、75bpsの利上げが市場のコンセンサスとなっていたが、予想を下回る50bpsの小幅利上げが決定された。マックレム・カナダ中銀総裁の会見では、リセッション入りの可能性があるとしつつも、利上げ継続が必要であるとのタカ派姿勢が示された。また、12月に行われる会合での利上げ幅は25bpsか50bpsになる可能性も示された。今年のインフレ率見通しは7月時点の7.2%から6.9%へと下方修正され、インフレ率は2023年末までに3%、24年末までに目標の2%へ戻ると予想された。経済見通しは今年後半から来年初めにかけて成長が鈍化するとし、23年の成長率が1.8%から0.9%へ引き下げられた。カナダ中銀の利上げペースが鈍化したことで、各国中銀の積極的な利上げが緩和されていくとの予測が出始めている。2日のFOMCでは75bpsの利上げは確実視されており、FRBによるインフレ抑制へのタカ派姿勢は維持されると思われるが、米経済指標に経済減速のサインが各所に表れており、パウエルFRB議長から今後の利上げペースに関して言及があるかに注目が集まっている。また8日の米中間選挙は、上院は民主党と共和党が拮抗し、下院はやや共和党優勢と伝えられている。ねじれが生じる場合は、ドル売り材料になると見られ、共和党が上院・下院共に勝利した場合は、ドル高牽制姿勢が示される可能性もあり、ドル安への動きが更に強まると予想される。原油はリセッション懸念や、中国共産党の新指導部による経済政策への不透明感に下振れリスクは健在だが、欧州連合 (EU) のロシア産原油禁止措置を12月に控え、冬季に向けての供給懸念も高まっている。今月は引き続き緊迫するウクライナ情勢などの地政学リスクの高まりによるドル高に注意しつつも、ドル安への可能性が意識され、USD/CADは1.33-1.38での推移を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で今流行っていること(流行っているもの)』
カナダは秋真っ盛りで、紅葉もピークを迎えつつあります。この季節になるとハロウィーンの飾りつけで、町の装いも一変。季節限定のパンプキンマフィンやドーナツ、パンプキンスパイスラテ、パンプキンスープなどが、カフェなどのメニューに登場します。パンプキンパイは感謝祭 (Thanksgiving day) の時に、食後のデザートとして食べるのが習わしとなっています。各地の農場ではパンプキンの大きさと、重さを競うコンテストが開かれ、巨大パンプキンがお披露目されます。300-500キロもの大きなパンプキンがごろごろと並び、よくぞここまで育ったものだ、その大きさに驚かされます。ちなみに今年はアルバータ州の1150キロ(軽自動車くらい)の重さ)のパンプキンが記録を更新し、カナダ史上最大のパンプキンとなりました。果たして、この記録は打ち破られるのか、来年のコンテストに早くも熱い視線がそそがれています。世界記録である1225キロのイタリアのパンプキンを追い抜くことも夢ではありません。農場に直接行き、お気に入りのパンプキンを収穫する人もいます。秋の農場風景も楽しめ、イベントではパンプキンカービングを教えてくれるところもあります。新鮮な野菜や果物、手作りパイやジャムなど購入できますのでお勧めです。また数千個もの彫刻されたパンプキン・ランタンが夜道を照らす、幻想的な“パンプキン・アフターダーク”と言うイベントも各地で行われています。カナダでは今が旬のパンプキンが、食べられ、飲まれ、飾られ、時に投げ飛ばされますが、野菜を超越した活躍を見せ、大人気となっています。

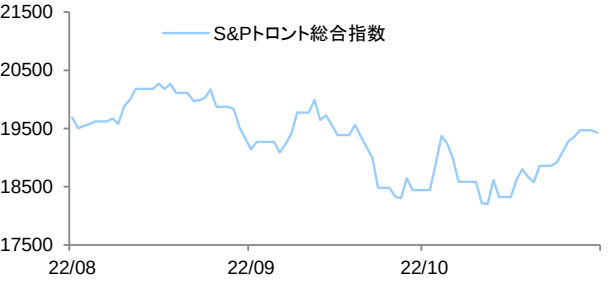
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/5	建築許可件数	8月	-0.50%	11.90%	-7.30%
10/5	貿易収支	8月	3.50b	1.52b	2.37b
10/7	ネット雇用変化	9月	20.0k	21.1k	-39.7k
10/7	失業率	9月	5.40%	5.20%	5.40%
10/14	鉱工業売上高 (前月比)	8月	-1.80%	-2.00%	-0.60%
10/14	住宅着工件数	9月	265.0k	299.6k	270.4k
10/19	CPI (前年比)	9月	6.70%	6.90%	7.00%
10/21	小売売上高 (前月比)	8月	0.20%	0.70%	-2.20%
10/28	GDP (前月比)	8月	0.00%	0.10%	0.10%
10/28	GDP (前年比)	8月	3.70%	4.00%	4.40%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1390 ~ 1460
 KRW/JPY 10.101 ~ 10.638
 JPY/KRW 9.400 ~ 9.900

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 中野 博文

■ 先月の為替相場

10月のドル/ウォン相場はもみ合いの展開。海外時間の金利低下を好感し、4日のドル/ウォンは1,428.0にてスタート。豪州中央銀行が50bpの利上げ予想に対し25bp利上げにとどめたことから、FRBに対する利上げ減速期待も広がり米金利を中心に低下。この週はその他に目新しい材料がなかったものの、流動性が下がっていることも手伝って、ドル/ウォンのロングポジションのストップ取引を巻き込む展開が6日まで継続。ドル/ウォンは1,397.1まで下落した。5日には韓国9月CPI(結果:前年同月比5.6%、予想:同5.7%)が発表されるも、影響は限定的。しかし、7日海外時間には米雇用統計(結果:26.3万人、予想:25.5万人)が良好な結果になったほか、中国が30あまりの都市でロックダウンを再開との報道等あり、週明けの11日のドル/ウォンは1,438.1まで大きく上昇。12日に開催されたBOK会合では市場予想通り0.5%利上げ(2.5%→3.0%)を実施。利上げ自体は市場で織り込み済みであったことからドル/ウォン相場への影響は限定的となった。19日には9月英CPIが前年同月比10.1%と高い結果になると、欧州金利を中心に金利が上昇。20日海外時間にはフィラデルフィア連銀総裁が今年末の政策金利について4%を大きく越えると発言したことや良好な雇用指標が話題となり、米10年債利回りは一時4.3%台まで上昇した。さらに中国全人代への警戒感から人民元安が進行すると、ドル/ウォンは月高値1,444.2まで上昇した。しかし、さすがに金利上昇が過度であるとの見方が広がる中、25日にはカナダ中銀総裁が利上げ局面は終盤である旨の発言を行うと、米金利は全年限で反落。市場全体でドル売りとなり、ドル/ウォンも下落した。結局前月末比5.9ウォン安の1,424.3ウォンにてクローズ。

■ 今月の見通し

11月のドル/ウォンは下に行っていく展開を予想する。

10月のドル/ウォンに影響する主な材料は以下の2点。

①インフレ推移と米FEDによる金融政策②BOKによる金融政策

①10月上中旬は良好な米雇用統計や高止まりした期待インフレ率を背景に、米金利は全年限で上昇した。10月下旬には利上げ速度減速を期待させるFED高官からの発言も見られたことをきっかけに米金利は低下したものの、良好な雇用、住宅指標に悪化の兆しはあまりなく、金利上昇とドル買いのトレンドが変化したと考えるよりは8月から続いた米金利上昇の調整と考えたい。FOMC(11/3)次第ではあるものの、インフレ率が収まっていない中で本格的なドル売りを期待することは難しいだろう。

②10/12にBOKは利上げ(2.5%→3.0%)を実施。BOK総裁は韓国の政策金利の到達点を3.5%前後と予想し、ウォン安対策として利上げはしつつも、利上げによる家計債務への悪影響を考慮する旨の発言を行った。一方韓国では政府地方保証の入った社債が償還しなかったことが原因で、流動性への不安も広がる等市況は良くない印象だ。かかる中、韓国政府やBOKは流動性を供給する施策を相次いで展開している。かかる状況下、積極的にウォンが買われる状況は乏しいままだろう。

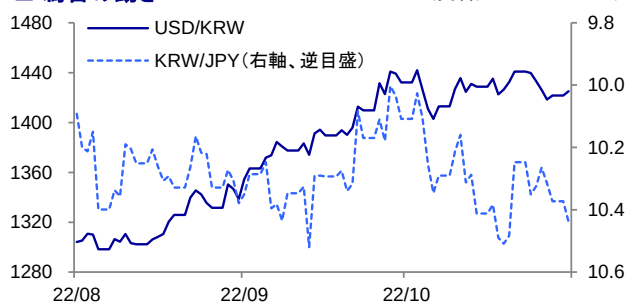
上記の状況を勘案すると、構造的なドル/ウォンの上昇は防ぎようがない印象だ。10月のドル/ウォンは9月のドル/ウォン急上昇に対する調整の要素もあり若干下落したものの、半導体市況の悪化やエネルギー価格の高騰を鑑みれば貿易赤字が変わるとは考えにくい。韓国企業への期待感が高まりにくいことを考えると、外国人投資家による株買いも調整の域を出ないだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で今流行っていること(流行っているもの)』
 当地で今流行っていることは日本への旅行ですね。ご存知の方も多いかもしれませんが、2018年には年間700万人以上の韓国人が日本に観光に行っていました。元来韓国人は世界一の海外旅行好きでして、一人当たりの年間海外旅行件数は1.5回を越えるほどでした。あれから4年間、ほとんどいけなかった遠い日本に行くことができるようになりました。その間、韓国では国内の観光地が賑わいを見せたのですが、インフレの影響もあり宿泊費用は高く、正直なところ評判が悪くなってきております(特に済州島についてはベトナムや沖縄に行くより高いと言われている始末です。。。)。最近になって往来が活発化したこともあり、日本にいった同僚から聞いたところ福岡空港では多くの韓国人の方が免税品の日本酒を買っていたとのことでした。韓国国内の新聞でも日本行きの飛行機が人気とのことでしたので、暫くはブームになるのかなと考えております。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/1	貿易収支	9月	-3000M	-3770M	-9394M
10/1	輸出(前年比)	9月	5.7%	6.6%	6.6%
10/1	輸入(前年比)	9月	18.6%	28.2%	28.1%
10/12	BOK政策金利	9月	3.00%	3.00%	2.50%
10/14	失業率	9月	2.7%	2.8%	2.5%
10/21	製造業物価指数	9月	-	8.0%	8.2%
10/25	消費者信頼感	10月	-	88.8	91.4
10/27	GDP(前年同月比)	3Q	3.0%	3.1%	2.9%
10/31	鉱工業生産(前年比)	9月	-0.8%	-1.8%	-1.8%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 31.80 ~ 33.10
TWD/JPY 4.40 ~ 4.66

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

10月のドル/台湾ドルは上昇し、約5年10か月ぶりの台湾ドル安水準に

月初10/3は31.790でオープン。外国人投資家の台湾ドル売りから31.8台に上昇した場面もみられたが、米9月ISM製造業景気指数が予想を下回ったことから金融引き締めに対する警戒感が緩み、米株が反発したことを受けて10/4は台湾株も上昇し、台湾ドル買いが優勢に。また、RBAが予想より小幅な0.25%の利上げを決定したことも金融引き締め観測を後退させ、米長期金利が低下したことも台湾ドルが買い戻される材料となった。その後も台湾株が堅調に推移すると、10/6には2週間ぶりにドル/台湾ドルは31.5を下回り、一時31.485まで下落。しかし、31.5を下回ると輸入企業のドル買いが入り、31.5台に戻された。

月央では、連休後の10/11は前週の米9月雇用統計の結果を受けて、米国の金融引き締めを警戒する動きから台湾株も急落するとドル買いが優勢に。10/12には31.9台に乗せたものの、輸出企業等のドル売りも入り、31.9付近で売り買い交錯し、揉み合う展開が続いた。しかし、10/17には外国人投資家の台湾ドル売りから急上昇し、約5年9か月ぶりに32台に。しかし、32を超えると輸出企業のドル売りが入り、上値は押さえられ、その後は32.000ちょうどを挟んでレンジで推移した。

月後半に入ると、10/20には台湾株が下落するとレンジを上抜け、32.1台にまで上昇したが、中国のコロナ関連規制の緩和について報道されると台湾株が下げ幅を縮小させ、海外からの資金流入もあり、32.0台に戻した。しかし、外国人投資家の台湾ドル売りの流れを変えるには至らず、ドル/台湾ドルはじりじり上昇し、10/25には人民元安もあり、一時32.345まで上昇。その後は米国経済指標が市場予想より弱い数字が出たことやカナダ中銀が市場予想より利上げ幅を縮小されたこと等から米国の利上げペースが緩まるとの見方から、ドルが全面安になると32ちょうど付近まで戻した。

■ 今月の見通し

11月のドル/台湾ドルは上昇を見込む。

10月も外国人投資家の台湾株売り台湾ドル売りの流れが続いた。3月のウクライナ情勢が悪化した際は、海外の投資家が有事のリスク回避姿勢を強め台湾株を売っていたが、足許の台湾株の下落については景気減速への警戒感からの株売りであり、台湾ドル売りに繋がった。ここでは、8月以降の台湾株の下落は米株との動きも連動していたことから、台湾特有の地政学リスクがクローズアップされて売られていたわけではないことに注意したい。(ただし、10月後半は中国株が軟調に推移したことから、米株と動きが一致しない場面も見られた。)

11月についても底堅い推移となるであろう。9月の単月輸出額が前年同月比マイナスとなり、2年以上続いたプラス成長がストップした。地域別にみると中国・香港向けの輸出が大きく減少しており、中国の景気減速が影響している。鉱工業生産も前年比マイナスとなっており、マクロの指標でも景気減速が見てとれるようになってきた。今後については、9月の輸出受注を見ると前年同月比マイナスとなっており、雲行きも怪しい。半導体製造大手で休暇取得を奨励しているとの報道もあり、生産調整の色合いが強いとの見方が出ている。11月についても景気減速への警戒感から軟調な台湾株につられて、台湾ドルが弱い状況が続くと見込む。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

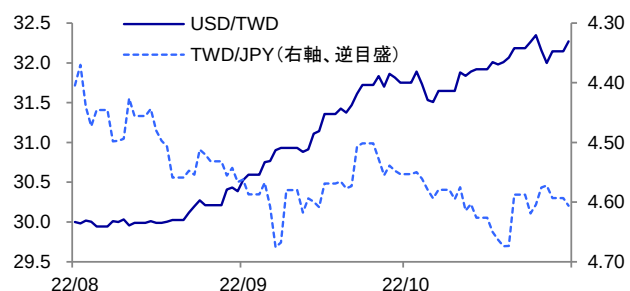
『当地の流行っているもの』

当地では10月に海外から台湾に来た際の隔離がなくなりました。同時に日本にもビザなしで行けることになったので、日本への旅行がブームです。

コロナ前はサービス収支が赤字で推移するほど、そもそも当地の人は海外旅行によく行っていたのですが、この2年以上は行けない状況が続いたため、その反動が表れています。コロナ前から日本は旅行先として人気でしたが、コロナ禍で日本のモノを買いに行けなかったこともあり、その人気はさらに高まっています。ただ、日本円が安いことも魅力であるようですが、航空機が便も少なく、チケット代も高いため、まだ様子を見ている人も少なくないです。それでも、日本から台湾にくる便にはお土産を持った台湾の方々が多く乗っていたと聞きます。日台で往来が気軽に出来る環境が整いつつありますが、早くコロナ前と同じような状況になることを期待します。

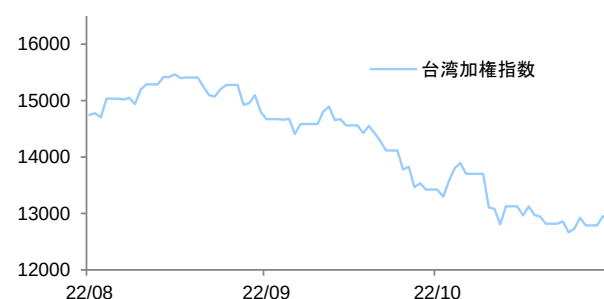
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/5	外貨準備高	8月	-	541.11B	545.48B
10/6	CPI (前年比)	8月	2.80%	2.75%	2.66%
10/7	輸出 (前年比)	8月	2.4%	-5.3%	2.0%
10/7	輸入 (前年比)	8月	9.8%	-2.4%	3.5%
10/7	貿易収支	8月	4.32B	5.02B	2.99B
10/20	輸出受注 (前年比)	8月	-5.0%	-3.1%	2.0%
10/24	失業率	8月	3.70%	3.64%	3.67%
10/24	鉱工業生産 (前年比)	8月	0.40%	-4.80%	3.26%
10/28	GDP	3Q	3.20%	4.10%	3.05%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.8350 ~ 7.8500
HKD/JPY 17.90 ~ 19.30

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【10月の香港ドル直物相場】

米国の堅調な雇用統計を受け、次回11月FOMC会合でも米国連邦準備理事会(FRB)による75bpの利上げが確実視される中、米ドル高圧力が強まり、10月の香港ドル直物相場はペッグ制の下限である7.85近辺で推移する展開となった。香港金融管理局(HKMA)は米ドルペッグ制維持の為、米ドル売り/香港ドル買いの為替介入を頻繁に行った結果、アグリゲートバランスの残高は1,000億香港ドル近くにまで減少した。また、株式市場に目を向けると、中国本土で開催された第20回共産党大会後に中国関連株が大きく売られる中、香港株式市場からの資金流出も香港ドル安圧力に繋がった。ハンセン株式指数は年初来で30%以上下落しており、ハイテク株で構成されるハンセンテック指数は史上最安値を更新した。加えて、香港株式市場におけるIPO活動も低調なままだ。域内経済については、失業率が4%以下に低下した一方で、公営住宅賃貸料の免除措置解除によるベース効果も要因となり、CPI上昇率が前年同期比4.4%と7年ぶりの高水準まで上昇した。また、香港の新型コロナウイルス感染者数は1日あたり5,000人前後で推移しており、香港政府は未だ入境規制の完全撤廃に慎重な姿勢を保っている。

【10月の香港ドル金利市場】

香港ドルHIBORは、9月末に四半期要因で上昇した後も、カーブ全体で上昇を続けた。現在1か月物は3.1%台、3か月物は4.5%台までそれぞれ上昇している。注目すべきは、3か月物の香港ドルHIBORと米ドルLIBORの金利差(HKD HIBOR-USD LIBOR)が今年1月来初めてプラスに転じたことである。これは、HKMAの米ドル売り/香港ドル買い為替介入による香港ドルの市場流動性減少が、金利上昇圧力として大きく影響を与えていることを意味している。中期金利に目を向けると、3年物香港ドルスワップ金利は一時5%に迫る水準まで上昇していたものの、短期金利の急上昇を受けて、香港ドルの長短金利差(3か月物HIBOR-3年物スワップ金利)は9月末の水準である-90bpsから-11bps近くまで縮小した。

■ 今月の見通し

【11月の香港ドル直物相場】

FRBは11月のFOMC会合にて再度75bpの利上げを実施すると見られており、引き続き根強い米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレードによる下押し圧力が香港ドルを7.85近辺に留め続けるだろう。しかし、FRBは12月に利上げペースの減速について議論を始める可能性が高いとの報道もある。市場にハト派と捉えられれば、米金利の低下が香港ドルと米ドルの金利差を一段と縮小させ、HKMAによる為替介入の規模縮小に繋がると考えられる。その一方で、第20回共産党大会閉幕以降、外国人投資家による対中関連投資意欲の減退が見られており、中国関連株と人民元は軟調な推移が続いている。これらは香港株式市場からの資金流出圧力に繋がる為、香港ドルにも下押し圧力が強まる可能性が高い。結論、FRBによる方向転換の姿勢が明確に確認できない限りは、ペッグ制の下限である7.85付近で推移すると想定している。

【11月の香港ドル金利市場】

香港ドル市場流動性の引き締まりが香港における銀行間レートの上昇圧力を強めていることから、3か月物を中心とした香港ドルHIBORはFRBの利上げによるFF金利上昇に追隨して上昇を続けるだろう。ただ、香港ドルHIBORと米ドルLIBORの金利差が縮小すると、キャリートレードが減少し、香港ドル直物相場への下押し圧力が弱まる。これによりHKMAの為替介入規模縮小に繋がれば、香港ドルの市場流動性減少ペースも弱まり、金利上昇圧力も緩和されていく可能性が高い。加えて我々は、既に銀行間金利が先々の期待を織り込みながら急激に上昇してきた為、たとえアグリゲートバランスが1,000億香港ドル以下に縮小しても、一段の金利上昇圧力は限定的になると見ています。また、FRBのピボット(方向転換)期待が高まっている間は、香港ドルスワップ金利も上値の重い展開となる可能性が高い。

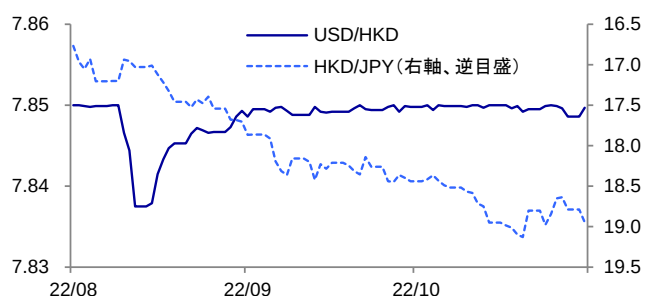
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で今流行っていること』

香港では最近、流行語を交えての会話が流行っていますので、少しご紹介させていただきます。誰かや何かを褒める時、香港の人は「世一」と言います。これは世界一という意味です。また、もし誰かがチャットで「siu4」と打っているのを見かけたら、これは小や四という意味ではなく、「笑い死ぬ」という意味になります。日本で言うと「草」に近い意味合いでしょうか。他の人にアドバイスを乞いたい時は、「どうしたらいいか」と聞くのではなく、「點部署」と言うのが流行っています。意味をあえて述べるのであれば、これに對しどういうポジションを取ればいいのか、という意味になるでしょうか。これらはスラングなので理解するのが少し難しいですが、ぜひ香港の現地スタッフに遠慮なく聞いてみてください。

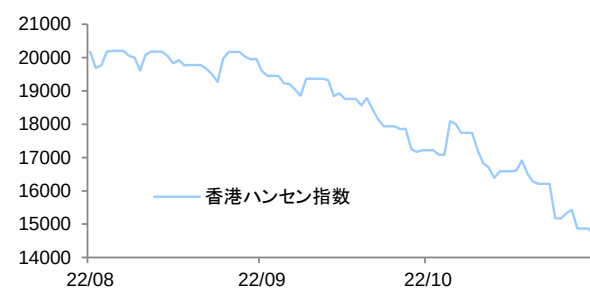
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/30	小売売上高(価額、前年比)	8月	2.7%	-0.1%	4.1%
10/6	S&P Global Hong Kong PMI	9月	-	48.0	51.2
10/7	外貨準備高	9月	-	\$419.2b	\$431.8b
10/20	失業率(季調済)	9月	4.0%	3.9%	4.1%
10/21	CPIコンボジット(前年比)	9月	4.1%	4.4%	1.9%
10/25	輸出(前年比)	9月	-14.0%	-9.1%	-14.3%
10/25	輸入(前年比)	9月	-16.4%	-7.8%	-16.3%
10/25	貿易収支(HKD)	9月	-\$22.2b	-\$44.9b	-\$13.3b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	7.0000	～	7.4000
	CNY/JPY	19.50	～	21.40
	100JPY/CNY	4.6700	～	5.1300

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 竹本 寛

■ 先月の為替相場

10月のドル人民元(USDCNY)は、底堅い推移を継続した。

国慶節明け10日のオンショアドル人民元(USDCNY)は7.10レベルでオープン。連休前は元高方向に調整してクローズしていたが、国慶節中のコロナ感染者数増加に伴い、一部地域では防疫対策が強化される中、11日には7.19台まで元安が進行。その後、13日のNY時間に米9月CPIが予想を上回ったことでドル高が強まり一時7.22台まで上昇を見せた。翌14日には元高方向に寄り付いて始まったが底堅い推移は継続された。

16日の共産党大会開幕後の発表内容には特段真新しさはなく、週明け17日の為替相場に与える影響は些少となった。FEDはタカ派姿勢を崩すことなく米金利に上昇圧力がかかる中でドル高地合いは継続。コロナ関係のポジティブなニュースで一時的に元買いを強める場面も見られたが、ドル主導の相場の中でUSDCNYは上値を伸ばす展開。

24日には7.24台半ばでオープン。香港市場や米市場での中国株安を背景に元安の流れ加速、日中値幅上限に張り付きながら、25日には7.30台の節目に乗せる。しかし、26日には米金利の低下を受けたドル売りの動きをきっかけにUSDCNYは急落し一時7.17をつける。27日には前日下落分の半値程度戻した後、月末31日にかけては底堅さを回復して7.25近辺へ戻している。

■ 今月の見通し

11月のUSDCNYは底堅くも上値は限定的と想定する。

USDCNYをファンダメンタルズで下支えるのは米中金政策の乖離が要因のひとつであることは間違いないだろう。共産党大会を経て、金融および財政政策に関する声明や発言もいくつかでてきたが、基本的には従前の政策を踏襲するものであり、「稳健」で「的を絞った」政策である点に大きな変化は確認できていない。

他国と比し強力な防疫措置による経済的な影響もさることながら、不動産投資等のデータは弱く、中国GDPの3割弱を占める不動産セクターの減速がどうしても足を引っ張る形となっている。当地での個人レベルで会話にはなるが、不動産購入等に係る優遇策を各種打ち出しているものの、積極的な購買・投資意欲に繋がっているとは言えないようだ。米国の利上げの折り返し地点の議論が浮上してきているものの、短期的には米中金融政策格差がUSDCNYの一定のサポート材料となりそうだ。

他方、上値についてはひとつの用途に達しているとも見る。9月の急速な元安局面においては、毎営業日設定されるPBOC基準値(オンショアにおいては日中のUSDCNYの値幅は基準値±2%に制限される)は、実勢レートとかい離を伴いながらも元安地合いに追随する動きを見せていた。一方で、10月の国慶節明け以降の基準値の設定水準は元安が進む中でも横ばいで固定化され、その結果22日には+2%のレンジ上限に達して物理的に元安の動きを抑制する形となった。同様の動きは2019年の米中貿易摩擦過熱時にも見られたが、その後のUSDCNYは元高方向へ軌道修正することとなっている。

今後もPBOC基準値の設定水準(およびそれによって決定される上限水準)を意識しながらの相場地合いが継続すると想定される。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で今流行っていること(流行っているもの)』

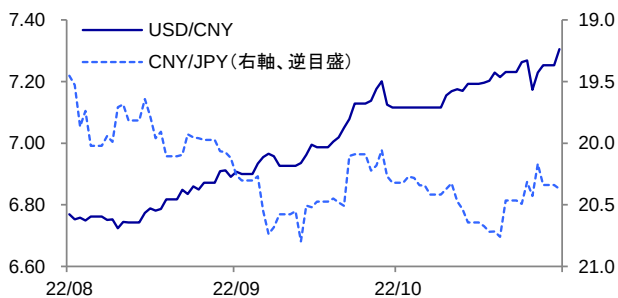
中国の特に都市部では「グランピング」の人气が出ています。上海も大都市のイメージがあるかもしれませんが、車を少し走らせれば、大きな公園を有する自然を味わえる場所がたくさんあります。

キャンプ道具などを購入しなくても、現地で借りてBBQや釣りなどを体験できる手軽さが好評なようです。中国の若者たちも日本でいうところの「インスタ映え」(中国にはインスタはないですが...)な写真を撮ることに夢中ですので、自然の中での写真は都市部とは違った自分を写すことができるのでしょう。

かくいう私もアウトドアでのキャンプやBBQに備えて、わざわざBluetoothスピーカーを買ったのですが、4月～6月という最高の時期を上海ロックダウンによって逃してしまっています。11月は本格的に寒くなる前の最後のチャンスだと思いますので、良い紅葉がある場所を探してみようかと思います。

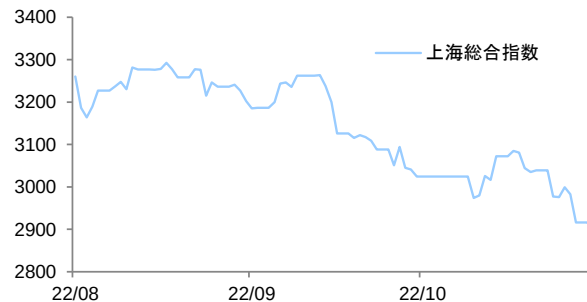
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/8	財新サービス業PMI	9月	54.4	49.3	55.0
10/14	CPI(前年比)	9月	2.9%	2.8%	2.5%
10/14	PPI(前年比)	9月	1.0%	0.9%	2.3%
10/20	LPR1年物	-	3.65%	3.65%	3.65%
10/20	LPR5年物	-	4.30%	4.30%	4.30%
10/24	GDP(前年比)	3Q	3.3%	3.9%	0.4%
10/24	貿易収支	9月	\$80.30b	\$84.74b	\$79.35b
10/24	小売売上高(前年比)	9月	3.0%	2.5%	5.4%
10/24	工業生産(前年比)	9月	4.8%	6.3%	4.2%
10/24	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	9月	6.0%	5.9%	5.8%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3710 ~ 1.4480
SGD/JPY 100.14 ~ 110.80

アジア・オセアニア資金部 成田 隼基

■ 先月の為替相場

2022年10月のUSD/SGD相場はSGD高が進行。

月初よりSGDはUSDに対し上昇。PBoCがCNY相場への介入準備を指示したとの報道が支援材料となった。英国の所得減税案の一部撤回や、米9月ISM製造業景気

指数の下振れを受けて、世界的に金利が低下する中、米雇用統計発表前までSGDはじりじりと上昇。月初1.43台半ばで推移していたUSD/SGDは、1.42台前半まで下落。

しかし10日、前週にFRB高官らのタカ派発言が続き市場のセンチメントが悪化していたことに加え、米9月雇用統計が堅調さを見せ米金利上昇、株安、ドル高が進むなか、SGDは軟調に推移。中国のゼロコロナ政策長期化への懸念も相まって、USD/SGDは14日にかけて1.44台前半の水準まで上昇。

14日、シンガポール金融管理局(MAS)は通常会合にて通貨政策の見直しを行い、政策バンドの中央値引き上げを発表。SGD高方向への調整であり、政策バンドの傾斜、幅については共に据え置きとした。この発表を受けて市場ではSGD高が進行し、USD/SGDは1.42台前半まで下落。しかし、その後のUSD/SGDは動意に欠ける展開。英国政府による減税策の大半の撤回が好感されリスク回避ムードが後退するも、人民元が軟調推移となり連れ安になるなど、強弱まちまちの材料が散見されるなか、USD/SGDは1.43台手前で小動きとなった。

その後、月末にかけてSGDは再び上昇。英国のハント財務相の再任や米利上げペース鈍化の思惑などからSGDは上昇し、USD/SGDは一時1.40台前半まで下落。その後はやや上昇し、USD/SGDは現在、1.41台前半の水準で推移している(31日午前時点)。

■ 今月の見通し

2022年11月のUSD/SGD相場はSGD安の進行を予想。

MASは2021年10月以降、緊急会合も含め5会合連続での引き締めを発表。特に輸入インフレ圧力が高まる中、こうした引き締めは賢明な判断であるとのスタンスを示した。事前予想では、中央値引き上げのみではなく、傾斜の再調整(SGD高方向)も同時に行われるとの見方もあったが、今般の会合では傾斜調整は行わなかった。また、今回発表された第3四半期GDP速報値は、前年同期比対比で+4.4%、第2四半期対比で+1.5%と強い内容であった。これについては、「コロナ規制の緩和により国内及び旅行関連セクターが予想を上回る伸びを見せたことが要因」とコメントしている。しかし、世界的な高インフレ、相次ぐ金融引き締めによる負の影響を見込む中、2022年の年間GDP成長率見通しを3-4%と下方修正し、2023年の成長見通しについては、「足元のトレンドを下回るペースとなる」と慎重な見通しを示した。加えて、「全世界的なインフレ圧力は来年にかけてより深刻なものになる」との見通しを示し、MASは2022年度のコア・インフレ見通しを平均4.0%程度と上方修正し、2023年については3.5-4.5%で推移すると予想している。

次回会合は2023年4月に予定されているが、インフレ圧力は確実に高まっており、通常スケジュールにはない緊急会合にて更なる引き締めを実施する可能性はあろう。また、10月のMAS会合後、確かにSGD安は一服し反転する動きを見せているものの、MAS会合でのタカ派的な影響というよりは、USD安進行を要因としたSGD高であると判断することが妥当。FRBがタカ派姿勢を維持する限り、本質的にアジア通貨が軟調となりやすい状況は不変であることから、足元のSGDはやや軟調、水準を切り返すタイミングは来春以降と予想したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で今流行っていること(流行っているもの)』

旅行とXBB(オミクロン株の派生型:グリフォン)が当地では流行ってます。

国土でよく例えられるのは、東京23区や琵琶湖と同じくらいの大きさ、そこに人口約560万人がおりますが、2年超にわたり閉ざされた島となっていたため、旅行熱が非常に強いのです。

というのも、近隣国へ行く手段が陸・海・空とそれぞれにあるので、週末の休みだけでもかなりのリフレッシュになります。その為、同僚連中も毎月誰かしらがどこかに遊び、お土産のお菓子が並びます。

9月のとある航空会社の旅客数は213万人(前年同月比で約13倍)といった報道もあり。勿論、出国も入国もあると思いますが、それでもかなりの人がシンガポールを起点に移動します。また、外国人入国者数は、8か月連続で増加しており、9月には約75万人(前年同月比で約40倍)が来星。結果、ホテル代も高騰しており、観光局が出した平均客室単価は\$250と約10年ぶりの高水準。ステイケーションするよりも、同じ値段で近隣国には行けてしまうので、そりゃ人流も活性化しますね。

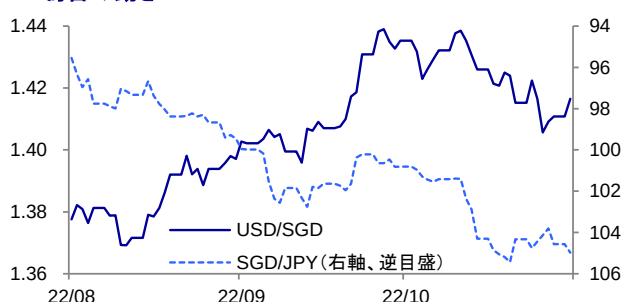
ちなみに、陸路・海路はまだ安定価格ですが、空路は油価上昇もあり、路線によっては2倍近い値段だとか。年末近辺の日本便はエコノミークラスでも20万円程度との情報もあり。それでも、周囲に聞くと、足元の円安を考えれば、行く価値はある、と言う声もあり、シンガポリアンからすると、冬の日本には相応の魅力があるようです。

一方でコロナ(当地ではXBB)の波は9-10月で高まっております。時が違えば、かなり厳格な行動制限が求められそうな感染者の水準ですが、今となってはその気配も無し。

(アジア・オセアニア資金部 福田)

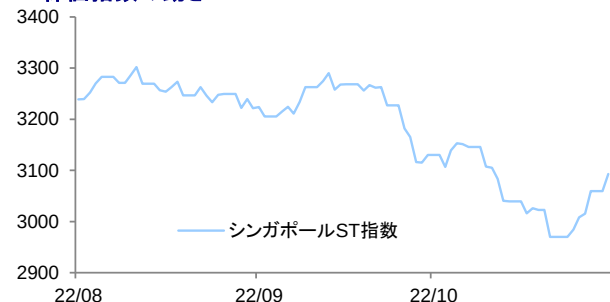
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	購買部景気指数	9月	49.9	49.9	50
10/5	小売売上高(前年比)	8月	15.4%	13.7%	13.9%
10/14	MAS会合				
10/14	GDP	3Q	3.5%	4.4%	4.5%
10/17	非石油輸出(前年比)	9月	6.9%	3.1%	11.4%
10/25	CPI(前年比)	9月	7.5%	7.5%	7.5%
10/26	鉱工業生産	9月	1.2%	0.9%	0.4%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 37.20 ~ 38.30
THB/JPY 3.80 ~ 3.93

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 末廣 絢太

■ 先月の為替相場

10月のドルバーツ相場は米国の利上げ観測を巡って上下する展開。37バーツ台後半で10月を迎えたドルバーツは、早々に38バーツ台に乗せる動きを見せるも、4日、オーストラリア中銀が予想外に小幅な利上げを決定すると、前日に発表されていた米国経済指標が軟調な結果であったことも相俟って米国利上げペース鈍化観測が台頭し、米金利の低下とともにドルバーツも下落。5日にはタイ9月CPIが発表され、前年同月比6.41%の上昇と5ヵ月ぶりに7%を下回る結果となるも、ほぼ市場予想と同水準の結果であったこともあり、ドルバーツ相場への影響は限定的に。寧ろ中国の連休中にドル人民元が下落するとドルバーツも連れる展開となり、一時37バーツ台前半まで下落する場面を見せた。然しながら、7日に発表された米9月雇用統計が良好な結果であることが確認されると、利上げ継続観測が再燃。FRBのタカ派スタンス維持が意識される中、ドルバーツは38バーツ台前半まで戻す展開となった。

中旬、13・14日のタイ休日を前にドルバーツは38バーツを割り込んだものの、13日に強い米9月CPIが発表されると、再び38バーツ台に乗せ、以降はタイ中銀からアナリスト向け会議にて「引き続き段階的な利上げが適切」との声明が発表され、従来のスタンスが維持されていることが確認されたことや、タイ政府要人からバーツ安容認ともとれる発言が報道されたこともあって、38バーツ丁度付近から前半にかけて底堅い推移が継続。20日には16年ぶりに高値を更新する動きを見せた。

下旬に入ると、米国利上げペースの減速観測を報じる記事やFedメンバーのハト派発言も見られるようになり、米金利が低下する中、ドルバーツも下落。タイ休日である24日には中国の新たな最高指導部が発表され、習近平総書記の側近で固められた人事に市場が警戒感を示す中、中国株、香港株、人民元が下落する展開に、バーツも連れ安となり、ドルバーツは一時上昇に転じるも、その後は米経済指標の軟調な結果を受けた米金利の低下に伴うドルの軟調な推移や、26日に発表されたタイ9月貿易収支の赤字縮小を受けたタイバーツ買いもあり、ドルバーツは37バーツ台後半まで下落。同水準にて27日オンショアクローズを迎えている。

■ 今月の見通し

11月のドルバーツ相場は、引き続きタイ国外要因に振られる展開を予想する。10月は4日のオーストラリア中銀の予想外の小幅な利上げに始まり、カナダ中銀、ECBと主要中銀のスタンス転換の予兆が垣間見える展開が相次いだ。ECBに関しては2回連続の0.75%の利上げにより「金融緩和の引き上げが相当大きく前進した」との認識を示したことで、今後の引き締めペース鈍化の示唆と捉える向きが出てきている。また、オーストラリア中銀やカナダ中銀に関しては、政策金利がターミナルレート(利上げの最終到達点)に近づいていることを認識しつつ、積極的な利上げによる経済への影響を懸念した対応であることが読み取れる。これら主要中銀の動きが米国の今後の利上げ観測に影響を与えているところであり、FRBの動向に注目が集まっている状況。

一方、タイ中銀は8月の利上げ開始以降、金融政策スタンスに大きな変更は見られない。バーツ相場に過度なボラティリティが見られた場合は対応するとしながらも、米国をはじめとした主要中銀の積極的な利上げに追随する必要はないとし、あくまで段階的な利上げを行うという主張を行っており、中銀の声明や、当局者の発言からもそれは一貫して見られる。ASEAN各国の中でも経済成長の戻りが遅れている状況下、今年9月までの観光客数が約570万人を記録し、年間の外国人観光客は1030万人とも予想され、観光業の回復が想定以上の速さとなっていることに加え、9月の貿易収支も輸出の伸びが貢献する格好で大きく赤字幅を縮小している状況下、経済を失速させたくないという考えは今後も変わることにはなさそうだ。

上記を勘案すれば、ドルバーツ相場の主要なドライバーは外部要因であると想定しており、米国をはじめとした主要国の金融政策の転換が意識されるのであれば、徐々にドルバーツ相場の上値が重なる展開には警戒をしておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で今流行っていること(流行っているもの)』
今年の8月に着任し、「さて、現地スタッフと何の話をしようか」と考えたところ、たどりついた答えの一つがアニメであった。とりあえず隣の席に座っている現地スタッフに日本のアニメを見たことがあるか聞いてみた。

スタッフA:「日本のアニメ？もちろん見ているさ。最近見たのはこれとこれと・・・」といった具合で熱心に説明してくれた。直近、日本でも人気を博したアニメを網羅しているようで、日本人として何か誇らしく感じた。ただ、たまたま隣に座っている彼がアニメ大好き人間だったのかも知れない。他のスタッフにも聞いてみることに。

スタッフB:「日本のアニメ？もちろん見ているさ。最近見たのはこれとこれと・・・」直近、日本でも人気を博したアニメを網羅しているようだ。さらに彼は続ける。

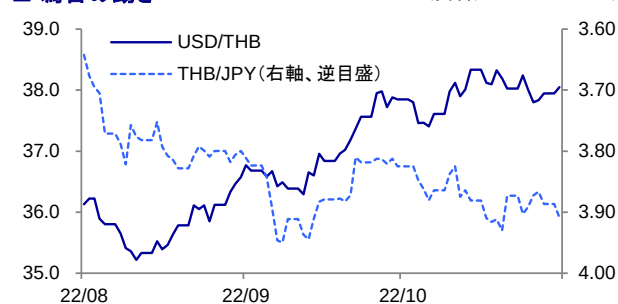
スタッフB:「漫画も読んでいるよ。最新話を逃さずチェックするために○○(某有名週刊漫画雑誌)をスマートフォンのアプリを通じて読んでるよ」

なるほど、おそらく私より彼の方が最近の日本の漫画事情に詳しいのだろう。

その他、周りを見渡してみると、日本のアニメキャラクターがプリントされたスマートフォンケースを使っている人がいたり、アニメキャラクターのクッションを使っている人がいたりする。また、休日にショッピングモールに出かけた際にアニメの映画公開記念の特設会場が設置され、混雑している状況も見ることができた。タイにおいて日本のアニメ・漫画の人気・認知度の高さを実感することは容易である。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/5	CPI YoY	9月	6.58%	6.41%	7.86%
10/5	CPI コア YoY	9月	3.20%	3.12%	3.15%
10/12	消費者信頼感指数	9月	-	38.6	37.8
10/20	自動車販売台数	9月	-	74,150	68,208
10/26	輸出(通関ベース) YoY	9月	4.10%	7.80%	7.50%
10/26	輸入(通関ベース) YoY	9月	20.00%	15.60%	21.30%
10/26	貿易収支(通関ベース)	9月	-\$3,050M	-\$853M	-\$4,215M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.68	～	4.78
	MYR/JPY	30.58	～	31.55
	JPY/MYR	3.17	～	3.27

マレーシアみずほ銀行 内田 暎

■ 先月の為替相場

10月のリングット相場は軟調に推移。ドル上昇の勢いが鈍化する中であつたが、7日の政府予算発表後、僅か3日で議会解散が発表されるなど、国内政治リスクの高まりを背景にリングットが軟調となった。

上旬は方向感に欠ける展開。英トラス政権が打ち出した減税案の撤回報道や軟調な米ISM製造業指数を材料視したドル売りの中、3日から始まった通常国会で早速解散総選挙の噂が流れるなど両通貨売り材料で綱引きとなりUSD/MYRは4.65中心に方向感に欠ける値動きとなった。その後、7日金曜に2023年度政府予算案が発表されたが、週明け早々月曜日午後にイスマイルサブリ首相が議会解散を宣言したことで政治リスクが高まった。

中旬に入ると議会解散を受けた与野党による水面下での議席争奪戦が繰り広げられる中、国内政局不安定化を懸念したMYR売りや米国インフレ指標を材料としたドル高リング安が進展。USD/MYRは24年ぶりの安値を更新した。注目の米国9月の物価指標は12日にPPI、13日にCPIが発表された。共に市場予想を上回ったことでUSD/MYRは心理的な節目となる4.70を突破した。

下旬にかけては、米国債が2008年金融危機時以来の利回り水準まで上昇する中、USD/MYRは8週連続でリング安を更新。ゼロコロナ政策による景気減速懸念が燃える中国は、18日に発表が予定されていたGDPが急遽17日に発表延期。想定事象でリスクオフ心理が強まり中国人民元は一段安となった。19日に発表された9月貿易統計が市場予想を下回り、中国経済の減速がマレーシア経済に悪影響を与える懸念が強まりリングは一段安となった。マレーシア選挙管理委員会は、第15回連邦下院議会選挙を11/19に実施する旨を発表し、想定範囲内の選挙日程で決着した。21日には9月CPIが発表された。市場予想を下回る+4.5%となり今年に入り上昇傾向が鮮明だった物価指標の落ち着きを示す内容は、11/3政策会合で大幅利上げを回避する材料として捉えられた。

■ 今月の見通し

今月のリングット相場は引き続き軟調な展開を予想する。国内では、3日にマレーシア中銀の政策金利発表が予定されている。直近9月のCPIでは、前年比+4.5%と上昇幅は鈍化。また、コア指数はホテル飲食などのサービス価格への転嫁が進み、上昇基調は継続したものの大きなサプライズ無しの結果。直近のCPIを踏まえ3日の政策会合では、25bp利上げが見込まれている。先月ベトナムやインドネシア中銀が大幅利上げを決めたが、マレーシア中銀の認識は引き続き現インフレ水準は適切なコントロール下にあるとしており、国内経済を支援する為に50bp以上の大幅利上げは見込まれていない。

また、先月10日に議会が解散し、第15回連邦下院議会選挙は本月19日実施が決まった。前哨戦とされる州議会選挙では与党連合が圧勝しており、前評判通り行けば現与党のUMNO率いる国民戦線の勝利が見込まれている。一方、今回の総選挙では投票権が21歳から18歳へ引き下げられる。若手層の票動向がダークホースとなり得ることから選挙結果には注目したい。アンワル氏率いる現野党陣営の希望同盟が下馬評を覆す政権交代を実現させる様な事態となれば、政治不安定化リスク想起でMYR売りが一段進む可能性を見ている。

海外に目を向けると、注目はやはり3日の米FOMCである。市場予想では75bp利上げが大方の予想となっている一方、先月26日にカナダ中銀が予想外の利上げペース減速を決めている。カナダ中銀結果を受け、利上げサイクルの終了時期が市場では俄かに注目を集めている。ここ最近のドルインデックスの軟化を踏まえると、発表後のドル金利ピークアウトが意識されれば、MYRにとっては支援材料となろう。その他、中国人民元動向にも注意を払いたい。中国共産党大会後にゼロコロナ政策の一部緩和を期待する声が出ていた中、それを裏切る形で行動制限の強化に動いている。中国経済に対する悲観的な見方が一段強まり人民元安となれば、MYRの上値を抑えることになろう。

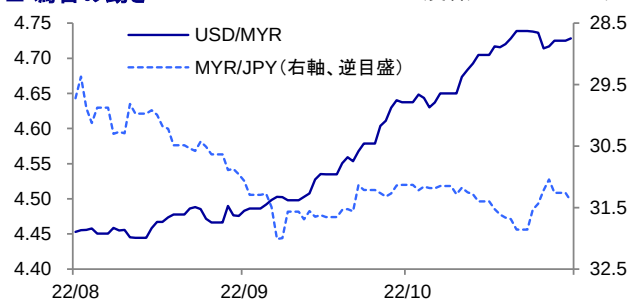
■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地で今流行っていること(流行っているもの)』
 “OMAKASE”は旬の食材にこだわった高級日本料理を食べたいローカルの間で一種の流行語になっています。マレー語や中国語で飛び交うローカル同士の会話で突如出て来る日本語であり、最初の頃は気になって仕方がありませんでした。この話をするとき普段静かな食いしん坊さんも興奮気味に話に加わってくるので、当地での注目度の高さを感じます。食べたいものは自身で選ぶのが基本スタンスの自分としては、お任せするのはお通しまでにしたい所ですが、レストランで食事するのは料理を全て店側へ任せる和のスタイルをローカルの皆さんが粋に感じているのだとすると嬉しい話です。ただ聞くところによると、任せられた店側が調子に乗って、独りよがりなOMAKASEを提供する店も出て来ている様です。注意が必要です。

話は変わって、当地ではエコノミークライスと呼ばれるローカルフードがあります。ご飯をよそった大きなお皿に、好きなおかずを店員さんに指差しながら、乗っけてもらう安くて美味しいローカルフードです。ローカルは勿論のこと、当地に住む日本人にとっても大人気です。好きな物を好きなだけ注文して食べらるこのスタイルが人気なのは納得です。ただ店によっては、値段設定がおまかせスタイルの所もあります。同じものを注文して支払う値段は店員さんの気分次第。一説にはお客さんの懐具合を見ながら決めているという話もあります。食べたいものを選ぶスタイルなので個人的にはこちらが好きですが、価格の透明性も確保してもらえると更に有難いものです。

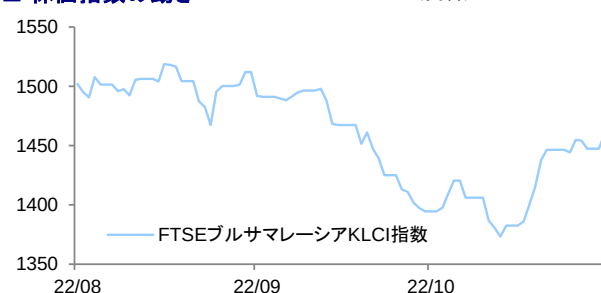
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/7	Foreign Reserves	30-Sep	-	\$106.1b	\$106.3b
10/12	Industrial production YoY	Aug	10.2%	13.6%	12.5%
10/19	Exports YoY	Sep	31.5%	30.1%	48.2%
10/19	Imports YoY	Sep	47.5%	33.0%	67.6%
10/19	Trade Balance MYR	Sep	17.35b	31.71b	16.92b
10/21	CPI YoY	Sep	4.6%	4.5%	4.7%
10/21	Foreign Reserves	Oct 14	-	\$104.5b	\$106.1b

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 15500 ~ 15700
 IDR/JPY 0.93 ~ 0.98
 JPY/IDR 102.04 ~ 107.53

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 綱島 正侑記

■ 先月の為替相場

先月のインドネシアルピアは下落。
 月初3日、15200台半ばでオープンしたドルルピアは、アジア新興国通貨が総じて軟調に推移する中、発表されたインドネシア9月CPI前年同月比で5.95%増となり、予想の6.00%を下回ったものの、前月の4.69%から上昇。ドルルピアは一時15300台まで上昇する局面も見られたが国債入札関連の資金流入や米金利の低下を受けルピアは反発。アジア通貨が全体的に底堅く推移する中、ルピアも一時15100台半ばまでルピア高が進展。しかしながら、7日、米連邦準備理事会（FRB）当局者のタカ派発言が相次いだことを受け米金利が反発したことで、ドルルピアは15200台後半までルピアは反落。翌週10日、15250近辺で取引を開始したドルルピアは前週に発表された米9月雇用統計の結果を受けドル買い優勢となる中、15300台前半まで上昇。翌11日以降もアジア通貨が対ドルで軟調に推移する中、ルピアも対ドルで下落し前週高値圏となる15300前半を上抜けると15300台後半まで上昇幅を拡大。13日、海外時間に発表された米9月CPIの結果が事前予想を上回る結果となったことを受け米金利上昇・ドル高が進展する中、ドルルピアは14日アジア時間オープン後から上昇し、15400台前半まで上昇幅を拡大。翌週も米利上げ織込みの進展、及び急激な利上げによる世界景気の後退懸念を背景にルピアが売られ軟調に推移。この日、発表されたインドネシア9月貿易収支はUS\$4.99Bioの黒字となり事前の予想を上回る結果となるも市場の反応は限定的。20日、インドネシア中銀会合では政策金利の0.50%利上げが決定され、これを受けルピアは一時対ドルで上昇したが、影響は一時的となり値を戻す展開。21日、米連邦準備理事会（FRB）のタカ派姿勢を受けドル買いが進展する中、ドルルピアも一時15600台を示現。翌週24日、週末に発表された中国共産党指導部の新体制を受け、統制が強化されるとの懸念から人民元売りが優勢となったことに連れ、アジア通貨が軟調に推移する中、ルピアも対ドルで軟調に推移。25日にはドルルピアは15600台前半までルピアが売られるも、軟調な米経済指標を受け米利上げペースが減速するとの見方から、ドルが売られドルルピアも15500台半ばまで下落してクローズ。

■ 今月の見通し

11月のルピアは対ドルで軟調に推移すると予想。
 インドネシア9月CPIは5.95%となり、インドネシア中銀の目標とする年2.0～4.0%を引続き上回る水準となった。インドネシア中銀は10月20日、7日リバースレポレート（主要政策金利）を0.50%利上げすることを決定し、8月・9月会合に引続き3会合連続での利上げとなった。
 ペリー中銀総裁は、国内景気が堅調との見方を示しており、加えてインドネシア9月貿易収支は黒字幅を拡大させていることを踏まえればインドネシアの置かれている状況としては決して悪いものではなくルピアにとっても過度に売られるとは考えにくい。一方で、10月のルピアは対ドルで2.1%程度下落しており、インドネシア固有の材料を持ってルピアが売られたというよりは、強いドルや周辺国の要因を主因に下落したと考えられる。
 13日に発表された米9月CPIの結果や、その後の当局者によるタカ派なコメントによりドルが買われる中で、ドルルピアは上昇しており、米国内でのインフレーション・米利上げペースの減速が織込まれるまではドルが強い状況にも変化はないものと予想。
 パウエル議長も米インフレの抑え込みに注力するとの姿勢を維持している中で、複数の指標から米インフレが落ち着くことが確認されるまではタカ派な姿勢を維持するものと考えており、それにはまだ時間が必要であろう。裏返せば米金利上昇・ドル高の流れもまだ続くと考えられ、ルピアも強いドルの影響を受け対ドルでは下落するものと予想するが、ドルルピアの直近高値圏では当局による介入が強まる可能性もある点には注意したい。

■ 今月のつぶやき（現地からの声）

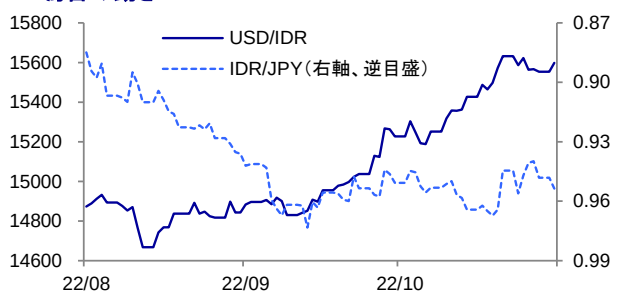
『当地で今流行っていること（流行っているもの）』

当地ではもともと辛い食べ物を食べる習慣はありますが、最近辛い食べ物の人気が急上昇。好みまたは辛さに対する耐久力に合わせて、辛さのレベルが調整して、注文できるようになっています。特にフライド・チキンの辛い版があちこちの店が出しています。
 流行の辛いフライド・チキンはアヤム・ゲブレッツといいます。「Ayam（アヤム）」はインドネシア語で“鶏”、「Geprek（ゲブレッツ）」はジャワ語で“つぶす”を意味し、揚げたて衣たっぷりのフライド・チキンを叩いてつぶしてサンバルと和えた料理です。好み辛さレベルによって、サンバルの量の調整ができます。鶏肉の食感が柔らかくなる様に叩いており、衣にサンバルが染み込み、辛い食べ物好きな人にはたまりません。
 フライド・チキンの他に、麺類にも激辛化の動きが広がっています。スーパーのインスタント・ヌードルコーナーに見て回ると、「激辛」の文字が目立ちます。当地でインスタント・ヌードルのシェアNo. 1のインドミーの70種類以上の商品の中から、激辛商品を10商品以上もあります。インドミーは世界中にも輸出しているので、スーパーなどに見かけたら是非賞味していただければと思います。

(インドネシアみずほ銀行 アストリッド)

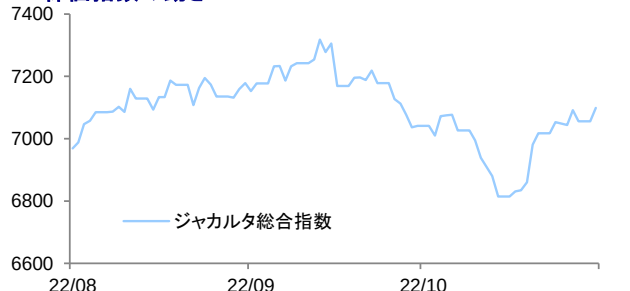
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	CPI (前年同月比)	9月	6.00%	5.95%	4.69%
10/17	貿易収支 (USD M)	9月	4,847m	4,990m	5,760m
10/17	輸出 (前年比)	9月	28.60%	20.28%	30.15%
10/17	輸入 (前年比)	9月	33.40%	22.02%	32.81%
10/20	BI 7daysリバースレポ金利	-	4.75%	4.75%	4.25%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 57.00 ~ 61.00
JPY/PHP 0.385 ~ 0.42

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榎 雄一郎

■ 先月の為替相場

米金融当局者のタカ派姿勢の強まりによる積極的な米金融引き締め観測を受けたドル上昇基調継続の一方、ペソ安防衛に向けた比政策当局の取り組み強化を受けて、ペソは過去最安値となる1米ドル＝59.000ペソでは強力にサポートされ、他アジア通貨が軟調推移となるも9月末以降、過去最安値付近の水準でのレンジ推移が継続し、アジア通貨の中で相対的な強さを見せた。

9月末にペソが過去最安値を更新し、1米ドル＝59.000ペソまで下落したことから、比中銀がペソの急激な変動を抑えるため、為替取引に関する報告ガイドラインや為替介入を強化したことから、10月に入って以降も、各国中銀による利上げを受けた世界的な景気減速懸念から、アジア通貨は全面安の展開となったほか、比株式市場からの資金流出などリスク回避の動きから、ペソは軟調地合いとなるも、節目の水準となる1米ドル＝59.000ペソ付近ではサポートされ、底堅く推移する展開となった。

9月の米雇用統計が堅調な結果となったほか、米9月消費者物価が予想を上回る伸びとなったことからドル高地合い継続となったほか、比経済に目を向けてみると、9月の消費者物価指数が前月の前年同月比6.3%から上昇し6.9%となったほか、8月の外貨準備高が950億ドルと前月から減少し、8月の貿易収支が60億ドルの赤字となり、前月から赤字が拡大し、過去最大を更新するなど、ペソ下押し材料となる内容が相次いだ。一方でフィリピン中銀がペソ安を抑制するため、為替介入の更なる強化や投機的取引の排除といった取り組み強化を進めていること、年内残り2会合で100BP以上の利上げを示唆したほか財務相が為替介入と利上げによるペソ防衛により1米ドル＝60.000ペソ割れ回避の決意を表明したことを受けてペソは過去最安値付近では引き続き、底堅さを見せ、方向感に欠ける展開が継続した。10月に入り狭いレンジでの推移に終始したが、米国の利上げペース緩和観測などからアジア通貨が反発を見せるなか、月末にかけてペソは約1か月の高値まで上昇した。

■ 今月の見通し

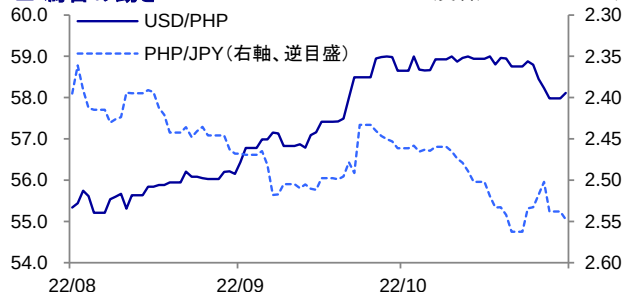
米当局のタカ派姿勢の強まりからドル主導の展開は変わらず、ファンダメンタルに変化がない中、トレンド転換の材料にも乏しく、ペソ軟調地合い継続を見込む。

米消費者物価は40年ぶりの高水準となり、11月、12月のFOMCでそれぞれ75BPの利上げの織り込みが進んでいるほか、米政策金利を4.5%～5%に引き上げることがあり得るといった発言が出るなど、複数米金融当局者から政策金利を従来の想定以上に引き上げる用意があることを示唆する発言が相次いでおり、広範囲にドルが買われる展開が継続する可能性が高い。また、フィリピンの経済活動回復による輸入増加と国際商品価格上昇を受けた経常赤字拡大基調が続いていることもペソ下押し材料となるほか、世界的な景気減速懸念から、センチメント悪化やそれを受けたリスクアセットの大幅調整からアジア通貨は下落を加速させる局面も想定される。

たが一方で、フィリピン中銀はインフレ圧力増大に繋がるペソ安防衛のため、為替介入強化や投機的取引の排除といった取り組みを強化しているほか、米国の動きに追従した政策金利大幅引き上げを示唆しているほか、財務相がペソ防衛の決意表明を行うなど、当面はペソは過去最安値付近水準ではサポートされる見込みが高い。加えて、年末にかけて比海外在留労働者からの送金が増加する季節性もペソの支援材料となり、足元のサポート水準を突破したとしてもペソ安のペースは緩やかなものとなる。

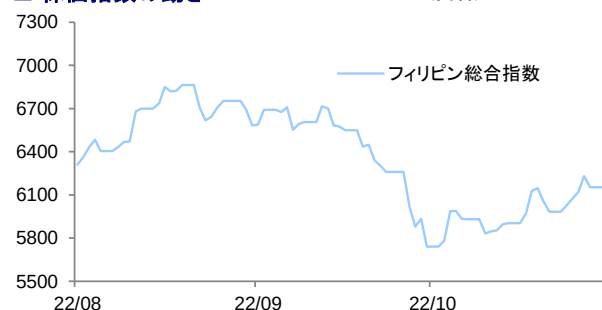
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク
期間 予想 結果 前回

インドルピー相場

予想レンジ:

USD/INR 80.00 ~ 85.50
INR/JPY 1.74 ~ 1.86

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【10月の米ドル/インドルピーは史上最高値を更新した】

9月30日にインド政府が国営銀行海外支店にあるドル資金を国営石油企業三社に供給する代わりに、為替スポット市場で輸入決済用のドル買いをしないよう指示したとのヘッドラインが出たことから、81.15まで一旦ドル安/ルピー高となったものの、週末を挟み81.60で当月取引を開始。OPEC会合を前に地場資源企業がドル買いを入れていることが話題。ただ、RBIからの為替介入も続いており、4日につけた81.35が当月の安値に。注目されていたOPEC会合では減産が決定され、ルピーには逆風に。7日には先月28日につけていた史上最高値である81.935を突破し、82.425まで上昇。

2週目は前週末インド市場クローズ後に発表された米9月雇用統計が良好な結果となると利上げ期待が一段と高まり月曜朝から82.70まで吹き上がる。ただ、インド当局から巨額のドル売り介入が出ると82.30レベルまで叩き落とされる。また地場通信企業が政府に対して5G周波数の使用料の支払いを行うため海外資産を国内に還流させているとの噂でドル売りが想起された。またこの週は為替介入がフォワード市場で活発に行われたことからフォワードプレミアムが急落した。

3週目に入っても気にされているのは為替介入で82.40が介入開始のトリガーと目され、結果的に82.50に到達することなく横這いの推移が続いていた。ただこの防衛ラインを19日に抜けると急伸し、また国営ガス企業のほか、石油企業の二社が約10億ドル分のドル買いを出しているとの噂に大台83を示現。翌20日にも勢いは止まらず、83.29の高値を示現。ただ、この日RBIがスポット市場で10億ドルのドル売りを出したとされ、急激に押し戻される展開。

月末にかけてはヒンドゥー暦での正月にあたり、祝日が続く中、取引量も細り、動意のない展開となった。82.48で28日15時半を迎えた。

5月から10月まで6か月連続で史上最高値を更新した。

■ 今月の見通し

【11月の米ドル/インドルピーは高値圏での推移を予想】

FRBは6・7・9月と3回連続で0.75%の利上げを実施し、3月と5月の利上げと併せて現在の金利は3.00-3.25%。今年3月以前はゼロ金利であったという背景を考えれば利上げの幅、速度共にシンプルに行き過ぎだろう。ただし、11月FOMCでは再度0.75%の利上げが既定路線のように市場織り込みがなされている状況。RBIも今年5月以降1.9%の利上げを断行しているものの、アメリカの利上げの前では霞んで見え、もはやドル/ルピー相場にインドのファンダメンタルズは影響を与えず、米利上げの動向だけを追っていればよいかのような展開だ。

そうは言ってもインドのことについて本欄で書かないわけにもいかないの、二点。一つ目はRBI、10月28日にRBIは臨時MPCを11月3日に開催すると発表した。インフレターゲット上限の6%を大幅に超える状況が続いており、インド中銀がインド政府に対してこの失敗について書簡の差し入れを行っており、この説明のため臨時会合を開催するとしているが、11月2日に公表されるFOMCの翌日であるというはおそらく偶然ではなく、FRBの利上げ次第・ドル高の動向次第ではRBIも動くのでは、と耳目を集めている状況。

二点目はドル売り/ルピー買い為替介入、10月は82.40-45で活発に介入が出た。10月29日に発表された10月21日週末までの外貨準備高は5245億ドルと一段と減少しており、先月「輸入代金の9か月分の外準があるのでまだドル売り介入は可能」と本欄に記載した通り当局はドル売りを出していることが肯定された。ただ、為替介入は短期的にドル高にキャップをすることはできても相場の流れを反転させることはできない、この点日本の財務省があれだけ円買い介入を行っているにも関わらず円安が止まらない状況と同じだろう。実際インドの外準はロシア戦争が始まった2月25日週には6315億ドル、現在との差額は1070億ドルの減少、しかし同期間にドル/ルピーは75.20から82.50までドル高/ルピー安が進行している。

ドルに振られる展開を想定も米利上げシナリオが崩れなければドル高/ルピー安が11月も継続することを想定。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で今流行っていること(流行っているもの)』
筆者拠点のあるタミルナドゥ州が今熱い！という話をしたい。

このほど、インド旅行省から発行された『Indian Tourism Statistics2022』によると、2021年4月～2022年3月、タミルナドゥ州ママラプラムへの外国人旅行者数が、あのタージ・マハルへの旅行者数を超えインド国内トップとなった(※)。報告資料によると、期間中、外国人旅行者の45.50%(144,984人)がママラプラムを訪れ、タージ・マハルは12.21%(38,922人)で2位だった。

ママラプラムは、インド最南タミルナドゥ州州都チェンナイから南へ約60kmの場所にあり、地元ではマハバリプラムという呼称で馴染みがある。ベンガル湾を望むビーチ沿いの長閑な田舎街だが、ユネスコ世界遺産に指定されている7～8世紀のヒンドゥー教遺跡群があり、信者の巡礼地ともなっている。その為、インド国内ではよく知られた旅行地の一つだが、外国人旅行者にも認知されているとは目から鱗だった。

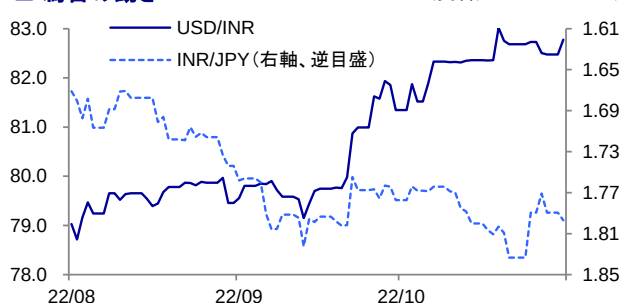
前出資料ではさらに、外国人旅行者の訪問地Top10のうち、ママラプラムを含む6つの遺跡がタミルナドゥ州の遺跡であり、また、2021年中のインド人旅行者の訪問地(州別)のTop1もタミルナドゥ州(11533百人)だったという。タージ・マハルのあるウッタル・プラデシュ州はTop2だった(10970 百人)。

コロナ禍が終息に向かい、海外渡航規制も緩和される中、なぜ今タミルナドゥ州が旅行者の心を動かしているのかは定かではないが、このブームが一時的では終わらずに、タミルナドゥの世界的認知の高まりに期待したいところだ。(チェンナイ・蛸名真理子)

(※) チケット購入により入場する政府管理の遺跡地の中での順位。

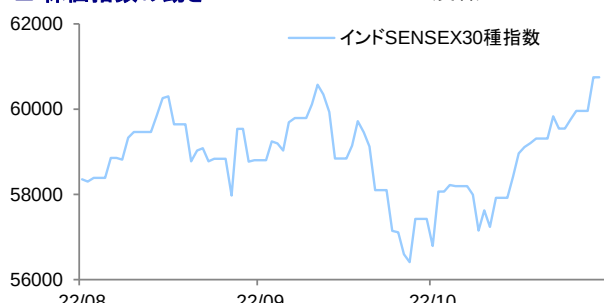
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	製造業PMI	9月	-	55.1	56.2
10/12	CPI	9月	7.36%	7.41%	7.00%
10/12	鉱工業生産	8月	1.7%	-0.8%	2.2%

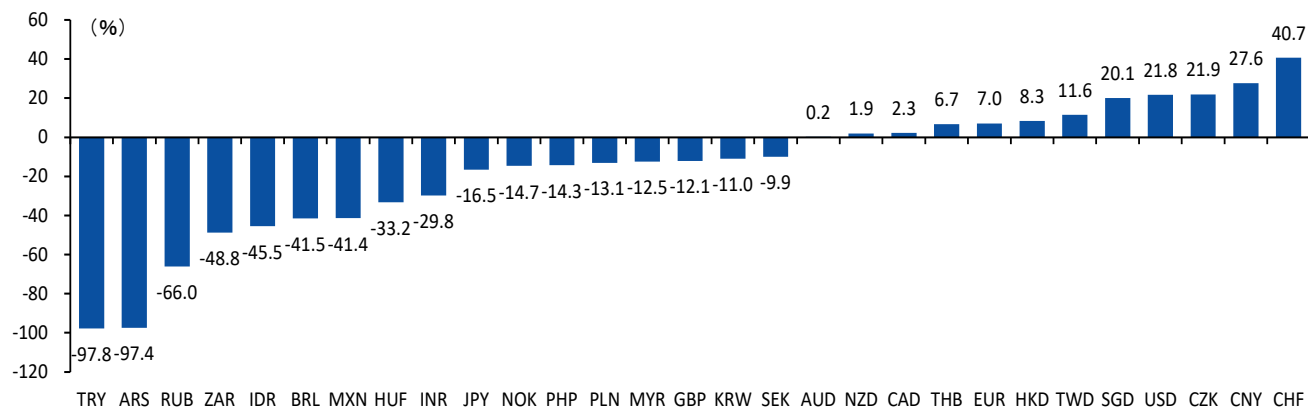
(資料) ブルームバーク

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2021年末	2022年10月末	騰落率	株式市場	2021年末	2022年10月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	36338.3	32732.95	-9.9%	-
日本	USD/JPY	115.08	148.71	29.2%	日経平均株価	28791.71	27587.46	-4.2%	-25.9%
ユーロ圏	EUR/USD	1.137	0.9882	-13.1%	ドイツDAX指数	15884.86	13253.74	-16.6%	-16.6%
英国	GBP/USD	1.3532	1.1469	-15.2%	ロンドンFTSE100指数	7384.54	7094.53	-3.9%	13.4%
豪州	AUD/USD	0.7263	0.6399	-11.9%	S&P/ASX200指数	7444.642	6863.459	-7.8%	4.6%
カナダ	USD/CAD	1.2637	1.3624	7.8%	S&PTロント総合指数	21222.84	19426.14	-8.5%	-15.1%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.3561	7.305	14.9%	上海総合	3639.775	2893.483	-20.5%	-30.8%
香港	USD/HKD	7.7966	7.8497	0.7%	香港ハンセン	23397.67	14687.02	-37.2%	-37.7%
インド	USD/INR	74.3375	82.775	11.4%	インドSENSEX30種	58253.82	60746.59	4.3%	-6.4%
インドネシア	USD/IDR	14263	15598	9.4%	ジャカルタ総合	6581.482	7098.89	7.9%	-1.4%
韓国	USD/KRW	1189.88	1424.98	19.8%	韓国総合株価	2977.65	2293.61	-23.0%	-35.7%
マレーシア	USD/MYR	4.1665	4.728	13.5%	ブルサマレーシアKLCI	1567.53	1460.38	-6.8%	-17.9%
フィリピン	USD/PHP	50.992	58.111	14.0%	フィリピン総合	7122.63	6153.43	-13.6%	-24.2%
シンガポール	USD/SGD	1.349	1.4165	5.0%	シンガポールST	3123.68	3093.11	-1.0%	-5.7%
台湾	USD/TWD	27.674	32.272	16.6%	台湾加権	18218.84	12949.75	-28.9%	-39.0%
タイ	USD/THB	33.211	38.051	14.6%	タイSET	1657.62	1608.76	-2.9%	-15.3%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2022年9月時点)



■ 実質GDP成長率

	2021Q1	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2020	2021
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	6.3	7.0	2.7	7.0	-1.6	-0.6	2.6	-2.8	5.9
日本*	-1.3	1.5	-1.8	3.9	0.2	3.5		-4.7	1.8
ユーロ圏	-0.8	14.2	3.9	4.8	5.5	4.3	2.1	-6.1	5.3
英国	-7.8	24.3	8.5	8.9	10.9	4.4		-11.0	7.5
豪州	1.5	9.8	4.1	4.5	3.3	3.6		-2.2	5.0
カナダ*	4.4	-3.1	5.3	6.6	3.1	3.3		-5.2	4.7
エマージングアジア									
中国	18.3	7.9	4.9	4.0	4.8	0.4	3.9	2.2	8.1
香港	8.0	7.6	5.4	4.7	-3.9	-1.3	-4.5	-6.5	6.3
インド	2.5	20.1	8.4	5.4	4.1	13.5		6.8	6.5
インドネシア	-0.7	7.1	3.5	5.0	5.0	5.4		-2.0	3.7
韓国	2.2	6.2	4.0	4.2	3.0	2.9	3.1	-0.7	4.1
マレーシア	-0.5	15.9	-4.5	3.6	5.0	8.9		-5.6	3.1
フィリピン	-3.8	12.1	7.0	7.8	8.2	7.4		-9.5	5.7
シンガポール	2.0	15.8	7.5	6.1	3.9	4.5	4.4	-4.1	7.9
台湾	9.2	7.8	4.4	5.3	3.7	3.1	4.1	3.4	6.6
タイ	-2.4	7.7	-0.2	1.8	2.3	2.5		-6.2	1.5

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	22/02	22/03	22/04	22/05	22/06	22/07	22/08	22/09	2020	2021
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.8	3.6	3.6	3.6	3.6	3.5	3.7	3.5	8.1	5.4
日本	2.7	2.6	2.5	2.6	2.6	2.6	2.5	2.6	2.8	2.8
ユーロ圏	6.8	6.8	6.7	6.7	6.7	6.6	6.6		8.0	7.7
英国	3.8	3.7	3.8	3.8	3.8	3.6	3.5		4.5	4.6
豪州	4.0	3.9	3.9	3.9	3.5	3.4	3.5	3.5	6.5	5.1
カナダ	5.5	5.3	5.2	5.1	4.9	4.9	5.4	5.2	9.6	7.4
エマージングアジア										
中国									4.0	3.9
香港	4.5	5.0	5.4	5.1	4.7	4.3	4.1	3.9	5.5	5.4
インドネシア	5.8								6.0	6.4
韓国	2.7	2.7	2.7	2.8	2.9	2.9	2.5	2.8	4.0	3.7
マレーシア	4.1	4.1	3.9	3.9	3.8	3.7	3.7		4.5	4.6
フィリピン	6.4	5.8	5.7	6.0	6.0	5.2	5.3		10.4	7.8
シンガポール	2.1	2.2	2.2	2.2	2.1	2.1	1.9	2	3.0	2.7
台湾	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.6	3.9	4.0
タイ			1.4			1.2			1.7	

(資料) ブルームバーグ、Macrobond、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	22/01	22/02	22/03	22/04	22/05	22/06	22/07	22/08	22/09	2020	2021
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	7.5	7.9	8.5	8.3	8.6	9.1	8.5	8.3	8.2	1.2	4.7
日本	0.5	0.9	1.2	2.5	2.5	2.4	2.6	3.0	3.0	0.0	-0.3
ユーロ圏	5.1	5.9	7.4	7.4	8.1	8.6	8.9	9.1	9.9	0.3	2.6
英国	5.5	6.2	7.0	9.0	9.1	9.4	10.1	9.9	10.1	0.9	2.6
豪州			5.1			6.1			7.3	0.9	2.9
カナダ	5.1	5.7	6.7	6.8	7.7	8.1	7.6	7.0	6.9	0.7	3.4
エマージングアジア											
中国	0.9	0.9	1.5	2.1	2.1	2.5	2.7	2.5	2.8	2.5	0.9
香港	1.2	1.6	1.7	1.3	1.2	1.8	1.9	1.9	4.4	0.3	1.6
インド	6.0	6.1	7.0	7.8	7.0	7.0	6.7	7.0	7.4	6.6	5.1
インドネシア	2.2	2.1	2.6	3.5	3.6	4.4	4.9	4.7	6.0	2.0	1.6
韓国	3.6	3.7	4.1	4.8	5.4	6.0	6.3	5.7	5.6	0.5	2.5
マレーシア	2.3	2.2	2.2	2.3	2.8	3.4	4.4	4.7	4.5	-1.1	2.5
フィリピン	3.0	3.0	4.0	4.9	5.4	6.1	6.4	6.3	6.9	2.4	3.9
シンガポール	4.0	4.3	5.4	5.4	5.6	6.7	7.0	7.5	7.5	-0.2	2.3
台湾	2.8	2.3	3.3	3.4	3.4	3.6	3.4	2.7	2.8	-0.2	2.0
タイ	3.2	5.3	5.7	4.7	7.1	7.7	7.6	7.9	6.4	-0.8	1.2

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2020Q4	2021Q1	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2020	2021
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.9	-3.1	-3.3	-3.4	-3.5	-3.8	-3.9	-2.9	-3.6
日本	2.9	3.0	3.5	3.4	2.9	2.3	1.7	2.9	2.9
ユーロ圏	1.7	2.4	2.8	2.8	2.4	1.6	0.6	1.7	2.4
英国	-3.2	-3.2	-3.2	-3.5	-2.0	-3.3	-4.3		
豪州	2.4	3.0	3.1	3.5	3.2	2.4	2.3	2.4	3.2
カナダ	-1.8	-0.9	-0.7	-0.1	0.0	0.1	0.2	-1.8	0.0
エマージングアジア									
中国	1.6	2.3	1.9	1.9	1.8	1.8	2.1	1.7	1.8
香港	7.0	9.3	9.5	9.2	11.3	12.0	10.7		
インド	1.3	0.9	0.4	-0.5	-1.1	-1.2	-2.1	1.3	-1.1
インドネシア	-0.4	-0.2	-0.1	0.2	0.3	0.4	0.9	-0.4	0.3
韓国	4.4	4.9	5.6	5.8	5.1	4.7	4.2		
マレーシア	4.4	4.5	4.8	3.8	3.5	2.8	2.1		
フィリピン	3.5	3.4	1.8	0.3	-1.8	-2.8	-4.5		
シンガポール	16.8	16.8	16.7	17.0	18.1	19.7	19.4	16.8	18.1
台湾	13.9	14.6	15.3	14.5	14.7	15.1	14.7	13.9	14.7
タイ	4.2	1.7	0.8	-1.6	-2.1	-2.2	-3.4		

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在(%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準(%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	3.00-3.25	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2022/9/21	+75bp	2022/9/21	+75bp
日本	当座預金残高の政策金利	-0.10	緩和: 2008/10/30	0.30	2016/1/29	-20bp	2022/10/28	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	1.50	引き締め: 2022/7/21	-0.50	2022/10/27	+75bp	2022/10/27	+75bp
英国	バンク・レート	2.25	引き締め: 2021/12/16	0.10	2022/9/22	+50bp	2022/9/22	+50bp
豪州	キャッシュ・レート	2.60	引き締め: 2022/5/3	0.10	2022/10/4	+25bp	2022/10/4	+25bp
カナダ	翌日物金利	3.75	引き締め: 2022/3/2	0.25	2022/10/26	+50bp	2022/10/26	+50bp
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.65	緩和: 2012/6/8	6.31	2022/8/22	-5bp	2022/10/20	現状維持
インド	翌日物レポ金利	5.90	引き締め: 2022/5/4	4.00	2022/9/30	+50bp	2022/9/30	+50bp
インドネシア	7日物リバースレポレート	4.75	引き締め: 2022/8/23	3.50	2022/10/20	+50bp	2022/10/20	+50bp
韓国	7日物レポ金利	3.00	引き締め: 2021/8/26	0.50	2022/10/12	+50bp	2022/10/12	+50bp
マレーシア	翌日物金利	2.50	引き締め: 2022/5/11	1.75	2022/9/8	+25bp	2022/9/8	+25bp
フィリピン	翌日物金利	4.25	引き締め: 2022/5/19	2.00	2022/9/22	+50bp	2022/9/22	+50bp
台湾	再割引金利(公定歩合)	1.625	引き締め: 2022/3/17	1.125	2022/9/22	+12.5bp	2022/9/22	+12.5bp
タイ	翌日物レポ金利	1.00	引き締め: 2022/8/10	0.50	2022/9/28	+25bp	2022/9/28	+25bp
ベトナム	リファイナンス金利	6.00	引き締め: 2022/9/22	4.00	2022/10/25	+100bp	2022/10/25	+100bp

(注)インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行